

小田原古式消防調査報告書

令和7年3月

小田原市教育委員会

例言

- ・小田原古式消防調査（以下、本調査）は、小田原市無形文化財（民俗）の指定にかかる事業の一環で実施した。これは令和五年（二〇二三年）一月一六日に「鷹職組合から「文化財指定に係る申請書」を要望書として提出されたこと」に端を発する。しかし、小田原古式消防は、その全体像を示す報告例がなく、その価値を顕在化するため、文化財課による調査を開始した。
- ・本調査では、纏振り、木遣、階子乗りの練習と出初式、北條五代祭りの様子を記録した。また、かつての姿についての聞き書き調査、道具の記録、新聞記事などの文献調査を行った。本稿では、紙数の問題から、これらの調査記録のすべてを掲載することができないため、概要としてまとめるものである。
- ・本稿は単独の報告書として刊行を予定しておらず、『小田原市郷土文化館研究報告』に寄稿するため、同研究報告の形式で作成した。図版、資料は同研究報告では紙数が足りないため、本稿のみで使用する。なお、後述の「鷹職木遣採譜所見」（寺田真由美）は、同研究報告に収録していない。
- ・本調査にあたり記録を文化財課主任保坂匠、写真撮影を同課主任（令和六年（二〇二四年）度主査）鳥居紗也子、映像撮影を保坂匠が行った。また本書の執筆・編集は保坂匠が行った。
- ・調査日時、内容は次の通りである。
 - ・令和五年四月二四日（纏振り、木遣練習）、同年十月一七日（木遣練習）、同年一二月五日（階子乗り練習）、令和六年（二〇二四年）一月四日（階子造り）、同年一月一日（小田原市消防出初式）、同年五月三日（北條五代祭り）。
 - ・昭和四七年（一九七二年）の録音テープが見つかり、現状や他地域と比較するため採譜を行った。採譜は、京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員寺田真由美に依頼した。また本書所収の「鷹職木遣採譜所見」を執筆いただいた。採譜した曲目は次のとおりである。
- ・「真鶴」（「CD木遣り集」昭和四七年二月制作）、「真鶴・手古」（文化部研修大会第二六回、小田原鷹職組合、平成二六年録音）、「真鶴・手古」（文化部研修大会第二六回、川崎、平成二六年録音）、「真鶴・手古」（令和五年小田原鷹職組合木遣唄練習）
- ・本調査で収集した資料、撮影した写真、映像は文化財課で保存する。
- ・最後に、調査にご協力いただいた「鷹職組合、古式消防参加者の皆様、また調査、執筆にあたり昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科教授であり小田原市文化財保護委員の大谷津早苗氏にご指導いただいた、この場を借りてお礼申し上げます。

目次

| | | |
|-------|-----------------------|-----|
| 1 | はじめに | 1 |
| 2 | 小田原古式消防、鳶職に関する記録 | 1 |
| 2-1 | 江戸時代 | 1 |
| 2-2 | 明治時代 | 2 |
| 2-3 | 破壊消防の終わりとその後の古式消防 | 2 |
| 3 | 伝承組織・練習・準備 | 3 |
| 3-1 | 伝承組織 | 3 |
| 3-2 | 練習 | 4 |
| 3-3 | 準備・階子造り | 4 |
| 4 | 小田原市消防出初式 | 4 |
| 4-1 | 令和六年出初式の内容・行程 | 4 |
| 4-2 | 一九八〇年頃の出初式 | 6 |
| 4-3 | 例年の状況とコロナ禍(二〇二〇年)前後 | 6 |
| 5 | 芸態 | 6 |
| 5-1 | 木遣 | 6 |
| 5-2 | 階子乗り | 7 |
| 5-3 | 纏振り | 8 |
| 6 | 道具 | 8 |
| 6-1 | 木遣 | 8 |
| 6-2 | 階子乗り | 8 |
| 6-3 | 纏振り | 8 |
| 7 | 衣装 | 9 |
| 8 | まとめ | 9 |
| 9 | 参考資料 | 11 |
| 9-1 | 調査記録写真等 | 11 |
| 9-1-1 | 出初式参加者位置模式図・写真 | 11 |
| 9-1-2 | 練習、階子造り・写真 | 20 |
| 9-1-3 | 小田原北條五代祭り・写真 | 23 |
| 9-1-4 | 古式消防関係石造物・写真 | 24 |
| 9-1-5 | 階子乗りの技 | 25 |
| 9-1-6 | 階子乗りの技・古写真 | 34 |
| 9-1-7 | 衣装 | 36 |
| 9-2 | 鳶職木遣曲目・歌詞 | 41 |
| 9-2-1 | 鳶職木遣曲目 | 41 |
| 9-2-2 | きやり集(昭和三二年九月)・(昭和四〇年) | 44 |
| 9-3 | 記事 | 145 |
| 9-4 | 旧小田原藩町方火消纏雛形 | 147 |
| 9-5 | 話者 | 164 |
| 参考文献 | | 164 |
| 10-2 | 鳶職木遣採譜所見(寺田真由美) | 166 |
| 10-1 | 楽譜 | 178 |
| 10 | 楽譜と採譜所見 | 178 |

1 はじめに

古式消防は、江戸時代に遡る消防活動を由来とした鳶職に残る芸能である。

小田原には、この古式消防が現存している。江戸時代末期に存在した消防の伝統を継承し、「鳶職木遣」（以下、木遣）、「纏振り」、「階子乗り」（常用漢字では「梯子」と表記するが、本稿では『小田原鳶職組合 創立一一〇周年記念誌』にある「階子」を使用する）で構成される。現在では主に小田原市消防出初式、小田原北條五代祭り（以下、北條五代祭り）で実演される。

古式消防の歴史は古く、江戸時代前半の町火消制度まで遡る。町火消制度は江戸時代、万治元年（一六五八年）を嚆矢とし、享保一五年（一七三〇年）に火消人足が半減されたことを契機に、町人主体から鳶人足を主体とする町火消の体制へと変わっていく。古式消防が実演される出初式の起源は、明暦三年（一六五七年）の大火の後の万治二年（一六五九年）一月四日に老中稲葉正則が定火消を率い上野東照宮前で行った「出初」とされ、これを契機として毎年一月四日に上野東照宮で行われるようになり、次第に儀式化され慣例行事となり、今日の出初式に受け継がれているとされる^一。このように、古式消防は江戸時代前半から始まった消防活動に由来し、都市部で破壊消防に従事する鳶職により伝播、伝承された。

全国的には発祥地である「江戸の鳶木遣」が昭和三十一年（一九五六年）、「江戸火消しの階子乗り」が平成一八年（二〇〇六年）に東京都無形民俗文化財（民俗芸能）に指定され、「仙台消防階子乗り」が調査報告書の刊行後、平成二九年（二〇一七年）に仙台市無形民俗文化財に指定されている。県内では厚木市で「古式消防」が昭和四六年（一九七一年）市無形民俗文化財指定、未指定ではあるが横浜市、川崎市、藤沢市、平塚市、秦野市、松田町、湯河原町で現存もしくは実施されていた。

小田原の古式消防は、江戸時代末期に存在し、当時相模国最大の都市であり江戸に程近い小田原の古式消防は比較的早い段階で始まり、規模が大きかったと想定される。

2 小田原古式消防、鳶職に関する記録

小田原古式消防、鳶職の歴史について詳細な記録は残っていないものの、若干の

- 一 『江戸町人の研究』第五巻、一一五頁、一三〇頁
- 二 『東京の消防百年の歩み』、二二頁

古文書や片岡永左衛門が著した『明治小田原町誌』、新聞記事などから断片的に窺い知ることができる。

2.1 江戸時代

小田原市域において鳶職の名が初めて確認できる資料は、文政二年（一八一九年）一二月「小田原藩が領内の職人を統制する」^三で小田原藩が統制する十三職に「鳶職」が挙げられている。一方、鳶職の消防参加は、文政一一年（一八二八年）「旧小田原藩町方火消纏雛形」（小田原市立中央図書館所蔵）からわかる。「旧小田原藩町方火消纏雛形」を見ると、小田原宿では町内毎の町方火消のほかに五十人組を組織していたことが示され、鳶職がこの五十人組を構成していたとされる^四。

また、鳶職にかかる記載はないものの、『明治小田原町誌』明治二年（一八六九年）正月二〇日の項には「従来は」として、江戸時代末期の消防の体制について片岡の記憶が掲載されている。「従来は小田原宿拾九ヶ町は各町に消防夫の設備あり、小町は凡廿人、大町は四十人位にて、各戸主は自身此任に当り、器具としては纏、高張提灯、竜吐水、指又、階子、鳶口、玄馬桶、手桶、釣屏等にて、其服装は名主組頭の町役人は袴を着し雲形唐草模様又は家紋など其の好に随ひ染、或は縫模様したる胸当をなし、革又は木綿其他の火事羽織に家紋や模様を附たる火事頭巾を冠り、消防夫は其町の印を附し、木綿半纏に頭巾を着し、名主・組頭の指揮により消防に従事せり」^五としており、当時の消防における道具や衣装が窺える。

2.2 明治時代

明治時代に入ってから鳶職による消防を知り得る記録の初出は、『明治小田原町誌』明治二年正月二〇日の項に「消防組織を改正し、鳶職の者は拾人を以て消防夫となし、手当として老ヶ年拾五円、出場毎に老人金弍銭の弁当料を給与す事となれり」^六とある。次いで明治一三年（一八八〇年）一二月の項に「鳶職、消防夫并

三 『小田原市史 史料編近世Ⅲ藩領2』 No.一〇八

四 『小田原鳶職組合 創立一一〇周年記念誌』、五一頁

五 『明治小田原町誌 上』、五六頁

六 同書、五六頁

に巡査の役割を改正なす」^七とあり、ポンプ一台、龍吐水二丁、引倒方それぞれに指揮役の巡査と実働の鳶に役割を分けていたことがわかる。また、明治十四年（一八八一年）九月一五日の項には「町立消防組を改正し鳶職の者八拾人と定め」^八た。両記録から消防における鳶職・破壊消防従事者の重要性が窺われる。

芸能としての古式消防に関する直接的な記録はないが、同書明治二年一月一五日の項に「例年之通り火消揃をなせり」^九とあり、現在の消防出初式に類する行事が行われていたと考えられる。次いで明治十七年（一八八四年）一月一七日の項に「各町有志消防組の始めて出初式を挙行し以後例となす」^{一〇}とあり、この頃には出初式が行われていたことがわかる。その内容は不明であるが、明治四三年（一九一〇年）一月一三日の『横浜貿易新報』の記事「小田原 消防出初式」に、「小田原町全町の消防出初式は十一日午前九時より御用邸前広場にて挙行し、先づ本県警務課長代理岸本保安課長の点検あり夫より階子乗りありて次に例の注水試験の達磨落しあり終りを告げしは午後一時半頃なり」とあり、明治時代末には現在の小田原城址公園前の御濠端通りで放水と階子乗りが行われていたことがわかる。

鳶職については、明治二年（一八八八年）一月一五日に足柄下郡鳶職組合の結成について「鳶職組合規約御認可願」を鳶職惣代人二名と小田原幸町外四ヶ町戸長、荻窪村外七ヶ村戸長、板橋村外三ヶ村戸長、酒匂村外三ヶ村戸長の計六名の連名により神奈川県知事に提出し、明治二年（一八八九年）三月一三日神奈川県知事からの認可を受けた^{一一}。

2.3 破壊消防の終わりとその後の古式消防

大正時代以降も破壊消防が行われたことにより、消火活動において鳶職が大きな役割を果たした。しかし昭和十四年（一九三九年）四月に発布された「警防団令」により、鳶職が従事する消防組は防護団と統合され警防団となった^{一二}。ただし、戦

後も消防に鳶職が関わっていたとされ、鳶職のK氏（一九五八年生）の記憶では、昭和三年（一九二八年）生まれの父は、戦後すぐ昭和五年（一九五〇年）くらいの頃に階子役で、仕事中に火事が起き、雇っていた若い衆に自転車二台を本町の家から出させて、その自転車二台に一本の階子を括り付け運び、国道を渡ったそう。ただし、当時既に纏は使っていなかったそうだ。また、破壊消防の本格的な終焉は昭和十六年（一九六一一年）とされ、この年に破壊消防を担当する特設消防団を解散し、小田原市章金纏が贈られた^{一三}。

出初式について、『横浜貿易新報』の大正六年（一九一七年）一月七日、大正七年（一九一八年）一月一二日の記事から、引き続き放水と階子乗りが行われていたことがわかる。しかし階子乗りを鳶職が行っていたと想定されるものの、直接的な記録はない。時代が下るが『横浜貿易新報』の昭和十二年（一九三七年）一月一二日の記事「合併消防出初式」に、「小田原町並に早川大窪両村合併消防出初め式は例年一日挙行されたが本年は大日本消防協会松井博士の講演関係から十六日に延期されたので一日鳶職一、二番組の階子乗りだけ行った」とあり、階子乗りは鳶職が実施しており、一月一日に決められていたことがわかる。

大正十四年（一九二五年）四月、鳶職木遣の保存会である一聲会が組織され、喉に霊験があるとされる佐奈田霊社に石造真棒を奉納している。現在でも一聲会は鳶職により組織され活動している。

戦後の古式消防について、昭和十六年（一九五一年）一月二〇日の小田原市広報の記事「消防始式を行う」に「古式床しい纏振込みや梯子登りの演技があり」と記載されていることから、消防始式（現在の小田原市消防出初式）として継承されたことがわかる。その後、昭和四〇年（一九六五年）に始まった小田原お城まつり（現在の北條五代祭り）に初回から参加している^{一四}。残念ながらお城まつりについて、昭和四〇年六月一日広報小田原には古式消防の記載は見られない。鳶職のO氏（一九五九年生）の話では、昭和六一年（一九八六年）まで階子乗りを行っていたそう。現在は鳶職で行列を組み、纏振りと木遣を歌いながら行進している。

この他、古式消防が実演される機会は、小田原宿総鎮守と呼ばれた松原神社の例

七 『明治小田原町誌 中』、一六頁
八 同書、二六頁
九 『明治小田原町誌 上』、一〇四頁
一〇 『明治小田原町誌 中』、四五頁
一一 『小田原鳶職組合 創立一一〇周年記念誌』、二六頁
一二 同書、四〇頁

一三 『小田原鳶職組合 創立一一〇周年記念誌』、五〇頁
一四 同書、四六頁

大祭で、神社神輿の渡御の際に、鳶職が神輿の前で先導し、木遣を歌った。鳶職のY氏（一九六八年生）の話では、松原神社例大祭で神輿を載せた御所車を牛に曳かせており、鳶職が牛を曳く役、先導役を担っていた。神輿行列の先頭でジャランボウと呼ばれる木の棒を打ち付け先導する役が二人、その後ろに木遣を歌う鳶職が並び、その後ろが神輿であったそうだ。一〇年程前まで鳶が先導していたそうだが、平成二三年（二〇一一年）の東日本大震災による影響で体制が変わったものと思われる。なお、神輿を載せた御所車を使用していたのは、昭和三六年（一九六一年）から平成三年（一九九一年）までである^{一五}。

余談ではあるが、鳶職に関する記事として大正九年（一九二〇年）一月七日の『横浜貿易新報』「小田原町の鳶職組合紛擾」に、鳶職組合員が出入の芸妓屋に雇われ三ヶ日間箱丁の代りとして芸妓の箱持をしたとして、組合内で問題になっている。K氏によると、出入について、ゴヒイキ（ゴ最貞）とも呼び、近年まで数件付き合いがあったそうだ。前出の鳶職K氏は、四〇年くらい前になるが、駅前の眼科がゴヒイキで、息子さんの引越しの手伝いをした。その他小田原の街中にある医院や洋品店、塔ノ沢の旅館もゴヒイキだった。どぶ掃除なども手伝った。旅館は大掃除の手伝いをした記憶がある。どこも半纏をもらっていた。タテマエ（建前）の時も半纏をもらった。タテマエをやった所がゴヒイキになることが多いそうだ。タテマエについて、Y氏の話で、父はタテマエだけで一年食べていける程であったそうだ。年間九〇件行ったことがある。Y氏の若い頃に、ご祝儀は多いとき七万円をもらった。オヤブンである父はその倍はもらっていたらう。若い衆は一万円とか五〇〇〇円が多かった。

以上のように、戦後には消防活動から破壊消防がなくなり、鳶職は消防活動から離れることになる。既に纏振りは消防活動で行われなくなっており、この頃には消防出初式のみ見ることができた。しかし昭和四〇年（一九六五年）からは小田原お城まつりでも見られるようになる。

3 伝承組織・練習・準備

現在の小田原古式消防は、小田原古式消防記念会、特に木遣は一聲会が伝承している。両組織は鳶職が参加、運営しており、実質的には鳶職組合内部組織に近い形態である。

3-1 伝承組織

小田原古式消防記念会の設立は判然としないが、昭和三六年（一九六一年）に小田原鳶職消防記念会の名称で結成^{一六}された組織を改称したものである。また松原神社境内の木遣塚と呼ばれる石造灯籠は、「小田原 鳶消防記念会」により「昭和四十一年四月吉日」に奉納されている。この灯籠に記銘された寄付者名から、当時の役職を知ることができる。元老二名、取締四名、組頭五名、副組頭三名、小頭三名、副小頭六名、纏六名、階子六名、刺又六名である。

現在は古式消防記念会と呼ばれ、三〇人程の鳶職で構成される。その役職は鳶職組合の古い役職名を使ったもので、実際は組合の組合長、副組合長、会計などが運営している。古式消防記念会の役職は組頭、副組頭、小頭、平組、刺又、階子、纏がある。実質の運営は小頭が行い、小頭を経験した者が相談役として副組頭になる。

また鳶職組合に入る前の若者組として若鳶会がある。若鳶会は昭和四七年（一九七二年）に結成された^{一七}。若鳶会の役職は会長、副会長、会計、会計監査、レクリエーション、技能などがあり、順番に役職が上がっていき、会長を二年やると退会となる。入会は任意であるため、会員数が減り、現在は三人が参加している。K氏は、一八歳に仕事をはじめ、乗り子にならないかと声を掛けられ体験したが断った。しかし二〇歳になり若鳶会に入会すると乗り子になるものであった。若鳶会は鳶職になった人が入るが、入会した者は乗り子になるため、その年から乗り子になった。乗り子の役を終えると、木遣の練習をする。

ただし乗り子は必ず若鳶会に入る必要はなく、消防団員の参加や、階子乗りが好きな人は若鳶会を退会後も長くやっていた。

3・2 練習

古式消防の練習は、年に三回行う。ここでは令和五年（二〇二三年）の練習を紹介する。

・四月二日から五日間、纏振り、木遣の練習。鳶職組合二〇人と技能実習生二人が参加した。

調査日…令和五年四月二十四日（月）

場所…（纏振り）松原神社境内、（木遣）境内の小屋

一九時一五分 調査員が松原神社に到着。すでに十五人集まっており、纏振りの練習をしている。経験者が若手に振り方を見せながら教えている。

二〇時〇〇分 小屋で木遣の練習。役員など熟年者十人が参加。途中二人が追加。「五萬石」、「駅路」を練習した。手に棒を持ち、椅子に座って歌う。

二二時〇〇分 終了。組合長から挨拶。副組合長から連絡事項があり、草鞋が配られる。

・一〇月、木遣の練習。一〇名程が集まる。

調査日…令和五年一〇月一七日（月）

場所…松原神社境内の小屋

一九時四〇分 小屋で木遣の練習。鳶職組合員七人が参加。通して歌う。通しは「梃子」、「小車」。手に棒を持ち、椅子に座って歌う。練習は二一時で終了。

・一月二日から一ヶ月間、階子乗り練習。今年は二人が新人、一人が経験者である。K氏の話では、初めに肝つぶしを練習する。K氏も若鳶会に入った頃は何週間も肝つぶしの練習をした。

練習用の階子は本番用の三分の一程度と半分の高さである。この階子は地面に固定して使用する。

調査日…令和五年二月五日（火）

場所…酒匂川防災ステーション駐車場（小田原市寿町五・二・三三二）。

一九時〇〇分 乗り子二名が来て練習を始める。

一九時二〇分 乗り子一名が来たため三名で練習をする。

二一時〇〇分 終了

3・3 準備・階子造り

令和六年（二〇二四年）一月四日（木）

場所…松原神社境内（社殿裏）

参加人数…鳶職組合員一三人が参加

八時一五分 調査員が現地に到着した時、既に松原神社境内にて、階子造りが行われていた。一一時頃に作業終了。（八時一五分に木遣塚で木遣の三人が木遣の練習をしていた。本日の新年会で歌う練習とこの）

工程

・竹、木材から階子の胴部とコマを切り出す。

・コマは面取りする。

・竹は上部と下部にホジを切り、コマを通す。

・コマは一五本ネジで固定する。

その他…カギ（鳶口）の研磨

拝殿の軒下に完成した階子と古い階子を保管。小田原城保管の纏を移動し、拝殿内に保管。

4 小田原市消防出初式

小田原古式消防の実演は、小田原市消防出初式（以下、出初式）、北條五代祭りが主となる。特に出初式は一五〇年近い歴史をもち纏振り、木遣、階子乗りが実演されることから、本調査では出初式を中心に調査した。令和六年に調査した出初式の内容を次に記載する。

4・1 令和六年出初式の内容・行程

日時…令和六年一月一日（木）

場所…松原神社く報徳二宮神社く三の丸ホールく蕎麦屋（正庵）くミナカく万葉の湯く松原神社

七時〇〇分

松原神社境内で準備。太子講の準備（三宝とお供えを設置）準備は、階子に綱（ロップ）を結ぶ、階子、纏にウラジロ、ダイ、紙垂を紅白の紙紐で結ぶ。

八時二〇分

八時三〇分

お祓い（松原神社拝殿にて松原神社宮司による祝詞奏上）
組合長挨拶（拝殿前）
お清め（小頭が塩をまく、全員お神酒を飲む）
纏（二番）が纏振り。

階子乗り（田代、棚橋、荒木）、鳶口二人。

階子を立て、鳶口で固定。木遣師が歌う。階子乗り中は木遣を歌う。

八時五〇分

九時〇〇分

終了。集合写真撮影。
太子講（松原神社境内西側の太子堂前）
松原神社宮司祝詞奏上。

玉串奉奠（組合長、年寄、副組合長、小頭、纏、組合員、若鳶、乗り子）

なお、太子講は年に三回、一月一日、五月二二日前後の日曜日、九月二二日前後の日曜日に行う。

九時二〇分

九時四五分

纏、階子、鳶口を二宮神社へトラックで輸送。人は徒歩移動。
報徳二宮神社に到着、トラックから階子、鳶口、纏を下ろし、青銅の鳥居前で行列を組む。（ラジオの生放送取材があるため、一〇時まで待機）

九時五五分

参道から拝殿前に移動。纏は中央最前列。纏を振りながら移動。同時に木遣を歌う。

一〇時〇〇分

一〇時五分

階子乗り（荒木、田代、棚橋）
終了。階子を寝かせるまで、木遣は歌い続ける。
二宮神社から柵入りのお神酒が配られる。
三の丸ホールに移動。階子、纏、鳶口はトラック、人は徒歩で移動。

一一時五分

三の丸ホール「小田原市消防出初式」で古式消防として纏振りと鳶職木遣を実演。能登半島地震の影響により、直前で三の丸ホー

ル前での実演から三の丸ホール小ホール内での実演に変更され、階子が高すぎることから階子乗りは実施できず。纏は四本を振り、舞台の両袖に市章纏を飾る。

一一時一二分

一一時三〇分

終了。蕎麦屋・正庵（小田原市本町一丁目九一―一九）前へ移動。道具は手持ちで移動。
店の入り口前五mほど北側で行列を組み、木遣を歌い始め、同時に纏を振る。

纏は店舗入り口前で国道一号线へ出る。

階子乗り（田代、荒木、棚橋）
階子を立て、鳶口で固定する。乗り子が階子を登り始めると纏を振るのをやめる。

一一時三五分

一二時〇〇分

階子乗り終了。階子を倒すと、木遣を止める。
三の丸ホールへ徒歩で戻る。三の丸ホールから階子、纏、鳶口をトラックに乗せミナカへ移動。人は徒歩移動。

一二時〇〇分

ミナカ中庭（新小田原城下町）
二宮金次郎像向かって右側から入場し、金次郎像前に階子を立てる。

纏振りには二本（「一番」、「二番」）。

階子乗り（荒木、棚橋、田代）

一二時一〇分

一二時二〇分

終了。二宮金次郎像前で集合写真。万葉の湯へ移動。
万葉の湯南側五mほど手前から行列を組み、木遣を歌い始め、同時に纏を振る。

纏振りには二本（「一番」、「二番」）。

店舗入り口前で階子を立てる。

一二時三五分

階子乗り（田代、荒木、棚橋）
終了。
纏、階子、鳶口はトラックに積み込み松原神社へ移動。人は徒歩で移動。

纏は小田原城常盤木門の收藏庫へ移動し、収納。

階子は松原神社拝殿の軒下に保管。鳶口は、太子堂内で保管。

一三時二〇分 松原神社境内に組合員集合。

組合長挨拶。

乗子三人（荒木、田代、棚橋）の挨拶。

小頭挨拶。

一三時三〇分 全行程終了。

4.2 一九八〇年頃の出初式

四〇年程前（一九八〇年頃）の状況について、K氏から聞いた内容は次の通りである。

階子乗りについて、今は一本だが、K氏が乗っていた二〇歳から二七歳の頃は三本立てていた。当時は朝七時に松原神社に集合し、八時に国道から南側に行き荒久へ行った。その後小田原駅、魚沼、バス通りを南に下り三時に松原神社で他の階子と合流する。その後鈴廣へ行き、最後にだるま料理店で他の階子と合流した。三本の階子はそれぞれ別のルートを廻り、出初式会場と三時の松原神社、最後のだるま料理店では三本が合流して乗った。

K氏が最後に乗っていた三〇年前頃に二本になって、一五年〜二〇年前に一本になった。またY氏によると、三本の階子の一本は慰問に穴部の老人ホームなどを回った。二本になっても一本は慰問に行っていたそうだ。

4.3 例年の状況とコロナ禍（二〇二〇年）前後

例年、出初式会場は、三の丸ホール前で階子乗りを実演するが、令和四年（二〇二二年）は雨が降り三の丸ホールの中で行った。その前二年間はコロナ禍の自粛で実施しなかった。

令和五年（二〇二三年）は会場である三の丸ホール前の道でのみ行った。

コロナ禍以前は町の中をトラックで移動し、決まった場所で行った。

場所は三の丸ホールの前以外に、鈴廣や万葉の湯の前など三〇か所くらいあった。

5 芸能

小田原古式消防は、現在鳶職木遣、階子乗り、纏振りで構成される。

実演されるのは、一月一日の出初式で木遣、階子乗り、纏振り、四月神奈川県

鳶工業連合会主催の物故者慰霊祭（大雄山最乗寺）で木遣、纏振り、五月三日の北條五代祭りでも木遣、纏振り、一〇月神奈川県鳶工業連合会文化部研修大会でも木遣である。特に出初式では行列を組み移動し、松原神社を起点とし、報徳二宮神社、出初式会場、商店前で実演される。この行列には、権が参加していたことが、木遣塚石碑や聞き書きからわかるが、現在は参加していない。

5.1 木遣

出初式では、纏振り、階子乗り実演中と出初式会場で歌われる。トオシ（通し）で一〇分程度の時間である。トオシの曲目は、「マナヅル（真鶴）」、「テコ（手古）」、「ボウグルマ（棒車）」、「コグルマ（小車）」であるが、出初式会場では「コグルマガシラ（小車頭）」も歌われ、纏振り、階子乗りの実演中よりも長い一五分程度をかけて歌う。

木遣を歌うのは、キヤリシ（木遣師）でアニとオトの二人である。アニが一句歌い、オトが二句目を歌う。そのほかの参加者はカワと呼び、ステヤリを歌う。ステヤリは所謂合いの手である。カワの人数は決まっていない。また階子乗りの階子を支える鳶口もステヤリを歌う。

木遣は、鳶職の仕事で地固めをする際に真棒を引き上げ、落とす作業で力を合わせるために歌われた仕事唄とされる¹⁸。Y氏の話では、現在では、仕事唄として歌われなくなりましたが、タテマエや結婚式、葬式で歌われる。タテマエは上棟式である。施主からご祝儀をもらい木遣を歌う。結婚式にも関係者に呼ばれて歌うことがある。その際には、ご祝儀を出す側ではなく、ご祝儀をもらえる上にごちそうも頂ける。曲目は場面によって変わる。どんな場面でも初めに「マナヅル」、「テコ」を歌う。タテマエでは「ボウグルマ」を歌う。祝い事である結婚式や新年会では「エシ」、祝い事やイベントの最後には木遣ではないが「ノリト」を唱え、「マナヅル」を歌った後、手締めをしてお開きになる。不祝儀の通夜では「マツザカ」や「トオガネ」、葬式では、「クロガネ」、「マツザカ」、葬式の当日に納骨していた頃は墓前でも「クロガネ」を歌う。太子講の直会の中締めでは、「クロガネ」を歌う。その他『小田原史談』二三五号に掲載された「鳶三代、高橋組」では、祝い事の際に「千秋万歳」、

¹⁸高橋、二〇一三年、七頁

「君万歳」などを歌ったとある。なお祝儀、不祝儀であっても服装は、半纏であり、半纏が鳶の正装ということである^{一九}。

祝儀などでは座敷で歌うため、短い木の棒を床に刺すように持ち三角形を描くように動かし調子をとる。棒を床に打ち付けるのは、昔真棒を落し地固めをするためにロープを引き上げ、ロープを離すタイミングであった。「ヨンヤーラーセ」の「セ」で、ドンとやり調子をとる^{二〇}。

木遣の曲目については、昭和三二年（一九五七年）と昭和四〇年（一九六五年）作成された手書きの「きやり集」が保管されており、それぞれ曲数二四曲、二七曲が載録されている。また昭和四七年（一九七二年）に録音されたデータが遺されており、曲数二九曲である。現在歌われていない曲も、仕事、冠婚葬祭で歌われたものと想定される。曲目数の違いについては、他地域との交流による変化を検討する必要がある。例えば、K氏の話では、昭和三〇年代に東京の木遣師を呼び江戸の木遣を習ったそうだ。これを裏付けるように昭和三二年（一九五七年）八月四日の『神奈川新聞』の記事「キヤリ音頭も勇しく」に佐奈田霊社に江戸消防記念会が詣る際に、小田原の特設消防・一警会が迎え、合同で行列を組み木遣を歌ったとある。また、昭和の中期から末にかけて、横浜の木遣を参考にして練習をしていたとの話もあった。今後の研究に期待したい。

5.2 階子乗り

階子乗りは高さ六、四mの階子の頂上と中ほどで手や足を離しバランスをとる技を行う芸能である。階子の頂上で行う技をチョウジョウゲ（頂上技）、上から三段目くらいで足を掛けて行う技をトチュウゲ（途中技）と呼ぶ。特に途中技の中で、ウグイスノヒモと呼ばれる輪状の紐を使う技をワツパと呼ぶ。

階子がかげられると、乗り子は階子の手前で草鞋を脱ぎ、「おねがいします」と叫び階子に向かって頭を下げる。そして階子の真ん中まで登ると勢いをつけ一気に頂上まで登る。

頂上に登り初めに行う技は、トオミである。次の技は乗り子が決め、途中技を行う場合もある。O氏の話では、技は3つ、4つの動きの流れで、一つの技である。

^{一九} 高橋、二〇一三年、八頁
^{二〇} 高橋、二〇一三年、八頁

例えば、最初は一本遠見、腹亀、肝つぶし、逆さ大の字をやる。帆掛は、腹亀から逆さ大の字、帆掛で一つの技である。トチュウゲのウグイスは、上を向く（かなびき一芸）、下を向く（谷覗き）、上を向いて決め（途中邯鄲）、肝つぶしひとつの技である。一つの型（技と分けるため、便宜上型と呼称する）でも肝つぶしも外と中が、腹亀も回る、膝留めも回ったりするなどバリエーションがある。その他、昔はトイタガエシと呼ぶ技があったが今はやっていないとの事であった。

乗り子は一本の階子につき三人が必要である。三本の階子を立てていた時は九人必要であった。また一本の階子にカギ（鉤、鳶口のこと）が一四人つき、階子の中央部、下段、最下段の三か所に鳶口のカギをかけ固定する。

令和六年（二〇二四年）は階子一本の乗り子三人で実施された。その際に実演された階子乗りの技は次の通りである。

・松原神社

一人目（一本遠見「一本遠見、肝つぶし」、帆掛「一本腹亀、逆さ大の字、帆掛」、枕邯鄲「枕邯鄲、一本腹亀、肝つぶし」、二本遠見、膝留め）

二人目（一本遠見「一本遠見、肝つぶし」、八艘飛び「八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし」、鯨「鯨、逆さ大の字、胴鯨」、うぐいす「かなびき一芸、足首留め、谷覗き、途中邯鄲、かなびき一芸」）

三人目（二本遠見「二本遠見、肝つぶし、膝留め」、帆掛「一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛」、うぐいす「膝留め、谷覗き」）

・報徳二宮神社

一人目（二本遠見「二本遠見、肝つぶし、膝留め」、うぐいす「膝留め、谷覗き」）

二人目（帆掛「二本腹亀、逆さ大の字、帆掛」、枕邯鄲「枕邯鄲、一本腹亀、肝つぶし」）

三人目（八艘飛び「八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし」、鯨「鯨、背亀、肝つぶし」、うぐいす「かなびき一芸、足首留、谷覗き、途中邯鄲、かなびき一芸」）

・蕎麦屋・正庵

一人目（二本遠見、膝留め、膝留め）

二人目（帆掛「一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛」）

三人目（八艘飛び「八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし」、鯨「鯨、一本背亀、二

本背亀、肝つぶし^一)

・ミナカでの階子乗りは記録できず。

・万葉の湯

一人目(二本遠見、膝留め、膝留め)

二人目(帆掛「一本腹亀、二本腹亀、逆さ大の字、帆掛」)

三人目(八艘飛び「八艘飛び、一本腹亀、肝つぶし」、鯨「鯨、二本背亀、一本背亀、肝つぶし」)

5.3 纏振り

纏は、火消の組を示す旗印であり、元来は先人の馬印として隊を統率するための戦争道具であった。江戸時代初期は武士により消火活動が行われ、与力、臥煙役^{がえん}が大纏、小纏の纏持ちをした。町火消は当初纏ではなく、幟を使用した^が、享保一五年(一七三〇年)に現在のよう^{ばれん}な馬簾^{ばれん}をつけた纏を使用するようになった^二。

纏振りは、纏振込みとも呼ばれ^三、階子乗りの行列の移動中に振り、また階子に乗る場所に到着した際には、階子を立てる場所を中心として時計回りに移動しながら振る。

振り方は、持ち手の下部にカギがあり、ここを右手で持ちスナップを使いバレンが開くように回す。

一本のマトイに三、四人交代で一日廻る。マトイは全部で六本ある。「小」(一番)、「田」(二番)、「〇」(わ)、「三」(三番)、「ら」(四番)の頭がある四本と小田原市章金纏、小田原市章銀纏(「若」)の二本で計六本である。

6 道具

6.1 木遣

神奈川県職工業組合文化部での発表会や座敷で実演する際に二〇cm程度の木

三 山本、一九九三年、一一七頁、一一八頁

三 『小田原職組合 創立一一〇周年記念誌』、四五頁

の棒・サシボウを用いて調子をとる。練習時には椅子に座るため、八〇cm程度の棒を使用し調子をとる。

6.2 階子乗り

階子は、六、四mの長さがある。材料は支柱用の二本の青竹と踏ざんに木を使用している。竹の入手は竹屋がある。門松などを卸している業者で、そこに行つて真直ぐで二本の太さがあう竹を選ぶ。踏ざん用の木は節がないものが良いが、現在、木材は値段が高いため、頂上部だけ節がないものを使う。支柱と踏ざんの固定はボルトを使い、その上からロップ(麻縄)をかける。Y氏の話では、かつてはボルトではなく釘を割いて使つたそうだ。階子の制作は一月四日の午前中に行い、午後は新年会を行う。階子上部に銅板の筒「灰吹」^三を被せているが、一日までに板金屋につけてもらう。またロップをかけるのと、ウラジロをつけるのは出初式当日の朝に行う。

練習用の階子は組んであるものを保管しており、毎年同じものを使っている。高さは本番用の半分程度の物と、三分の一程度の二本がある。

階子を支える鳶口はカギと呼び、昔から使っているものを引き継いでいる。各家で持っている人もいるが、太子堂に保管しているものを使う人もいる。使っている鳶口は二種類あり、ナガエ(長柄)と普通の鳶口がある。ナガエは九尺(約三m)で階子の真ん中にかける。普通の鳶口は六尺(約二m)で階子の中段、下段にかけるために使う。

6.3 纏振り

纏は、令和六年(二〇二四年)の出初式に於て階子乗りの前や最中に「一番」一本、もしくは「一番」、「二番」の二本の纏を使用し、出初式会場では「一番」、「二番」、「三番」、「四番」の四本を振り、左右脇に小田原市章金纏、小田原市章銀纏(若鳶会)の二本を飾る。同年北條五代祭りでは、「一番」、「二番」、「三番」、「四番」の四本を振る。

現在使用していない古い纏も現存しており、練習用も含めて九本の纏がある(表)。

三 同書、五二頁

保管場所は、かつて、小田原城天守閣に展示していたことから、小田原城常盤木門の収蔵庫である。

小田原市章金纏は昭和三六年（一九六一）年）破壊消防を担当する特設消防分団を解散した際に市から贈られた。小田原市章銀纏（若鷺会）は昭和四七年（一九七二年）若鷺会結成の記念に元衆議院議長の河野洋平氏から贈られた。「〇（わ）」「二三番」の纏は、昭和三一年（一九五六年）小田原市と相海漁業から式場用と火事場用として二本寄贈された。相海漁業から贈られた纏は破損したため、昭和五八年（一九八三年）に当時の小田原市長山橋敬一郎氏により新調寄贈された。「ら」（四番）の纏は昭和四七年に若鷺会顧問の土屋賢太郎氏から寄贈された。^{三四}

纏の部位名称は、上部の印部分をアタマ、頭の下を振ると傘状に開く帯をバレン、下部の手で持ち操作する逆Y字状の金属部をカギと呼ぶ。

纏の寸法は、アタマの形によるが、二二〇cmから二六〇cm、アタマは五五cm、バレンは七五cm、手持ち棒は一三〇cmである。火事で実際に使用されたとの伝承がある古手の纏は、現在の物より二〇cm程度小ぶりである。現在の纏は火事場で使用されなくなったため、式典用に大型化したものと考えられる。また練習用の纏も出初式で使用するものより四〇cm小ぶりで、操作し易いように作られていると考えられる。

7 衣装

全役で共通して半纏、帯、ドンブリ（腹掛け）、股引、草鞋掛け、草鞋を着用する。

役職により半纏の意匠が異なる。襟と背の文字は、組合長（「組合長」、市章の中に「頭」）、副組合長（「副組頭」、丸の中に所属組）、小頭（「小頭」、丸の中に所属組）、鷺口（所属組、「階子」、若鷺会（「四番組」、市章の中に「若」、乗り子（レング模様）の半纏、「若陸」、所属組）、年寄（所属組、五角形に所属組）、纏（所属組、「纏」）である。小頭以上の役職は半纏の肩から袖に赤い線が入るため、アカバンテンと呼ばれる。

所属組は、「一番組」が小田原街中、「二番組」が小田原より西、「三番組」が川

東、「四番組」が若鷺である。

また鉢巻は当日朝配布された小田原古式消防の手拭を使う。乗り子と鷺口はこれを頭に巻く。他の役は特に決まっていない。巻き方は所謂「ねじりはちまき」である。

8 まとめ

古式消防は、江戸時代に遡る消防活動を由来とする。小田原では鷺職により伝承され、現在は主に小田原市消防出初式、小田原北條五代祭りで行われる。ただし、当地で発祥した固有の芸能ではなく、江戸から伝えられたと考えられる。伝搬時期は不明であるが、前述の通り、文政一一年（一八二八年）には纏が存在し、鷺職木遣、階子乗りも一〇〇年を超える歴史をもつことがわかっている。江戸時代の小田原は相模国最大の都市であり江戸に程近いため、県内の古式消防では比較的早い段階で始まり、規模が大きかったと想定される。都市部で継承されたことから継承事例が少なく、消防方法の近代化により衰退したため、現在まで保存されていることは希少性が高い。

さらに当地の古式消防は、関係資料が豊富に残されていることが特筆される。文政一一年に作成された「旧小田原藩町方火消纏雛形」をはじめ、『明治小田原町誌』中に、消防組織に関する記述がみられるなど、組織の変遷を追えることや、消防芸能の伝搬、都市としての小田原を考察する上で貴重な事例であろう。

| | 資料名称 | 点数 | 寸法 (cm) | 備考 |
|-------|----------------|----|--|----------------------------------|
| 1 | 纏「一番 (小)」 | 1点 | 高: 220 | 練習用か(比較的新しい) |
| 2 | 纏「一番 (小)」 | 1点 | 高 240、頭 75、バレン 75、持ち手棒 130、鉤幅 10 | 劣化が激しい。古いもの か。焦げはない。 |
| 3 | 纏「二番 (田)」 | 1点 | 高 220、頭 55、バレン 75、持ち手棒 130、鉤幅 10 | 劣化が激しい。古いもの か。焦げはない。 |
| 4 | 纏「市章 (金色)」 | 1点 | 高 260 | 展示用。実際に振るには 布製のバレンに付け替え る。 |
| 5 | 纏「市章 (「若」、銀色)」 | 1点 | 高 260 | 展示用。実際に振るには 布製のバレンに付け替え る。 |
| 6 | 纏「一番 (小)」 | 1点 | 高 260 | 現在使用している。 |
| 7 | 纏「二番 (田)」 | 1点 | 高 260 | 現在使用している。 |
| 8 | 纏「三番 (○)」 | 1点 | 高 220 | 現在使用している。 |
| 9 | 纏「四番 (ら)」 | 1点 | 高 260 | 現在使用している。 |
| 計 9 本 | | | | |

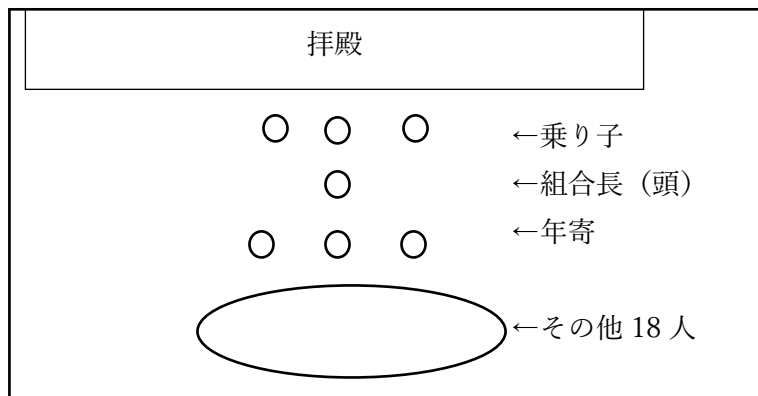
表 纏一覧 (小田原城常盤木門保管)

9 参考資料

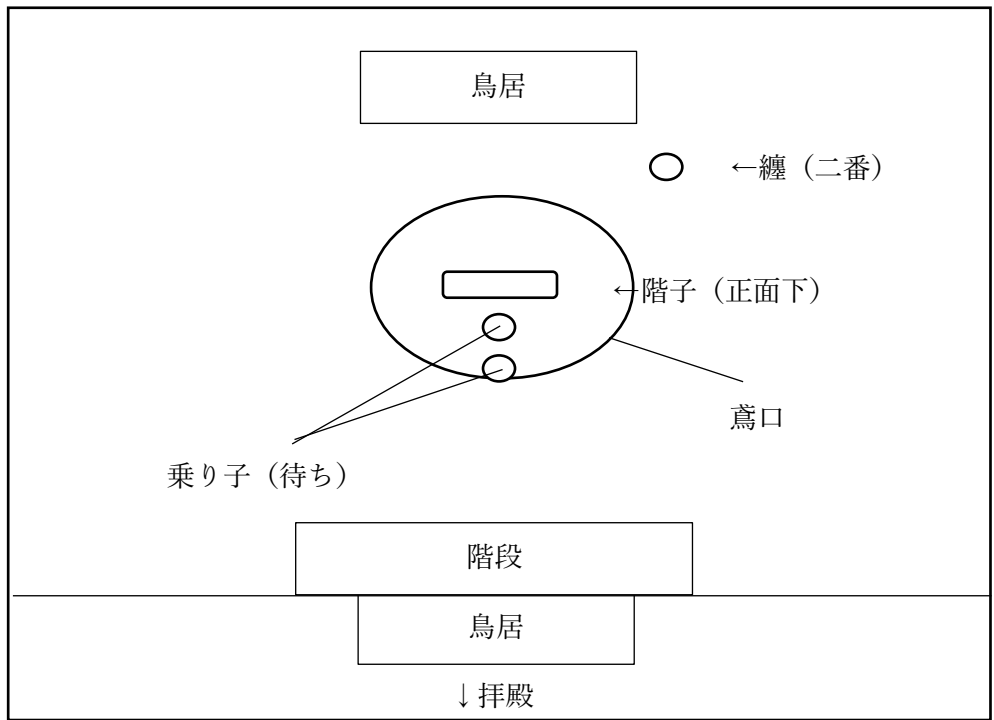
9・1 調査記録写真等

9・1・1 出初式参加者位置模式図・写真

松原神社・お祓い位置模式図



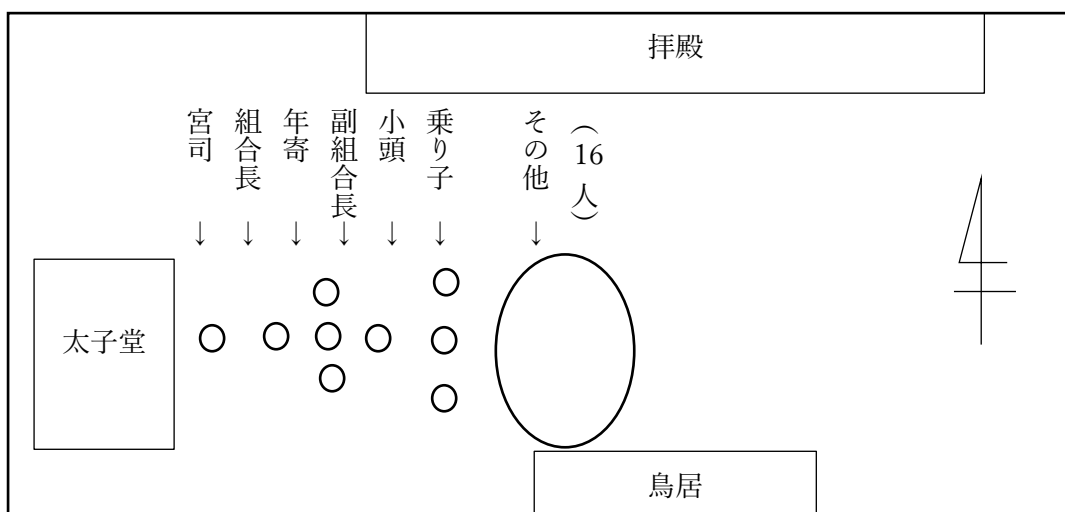
松原神社でお祓い（令和六年一月二日、鳥居撮影）



階子乗り位置模式図 (松原神社境内)

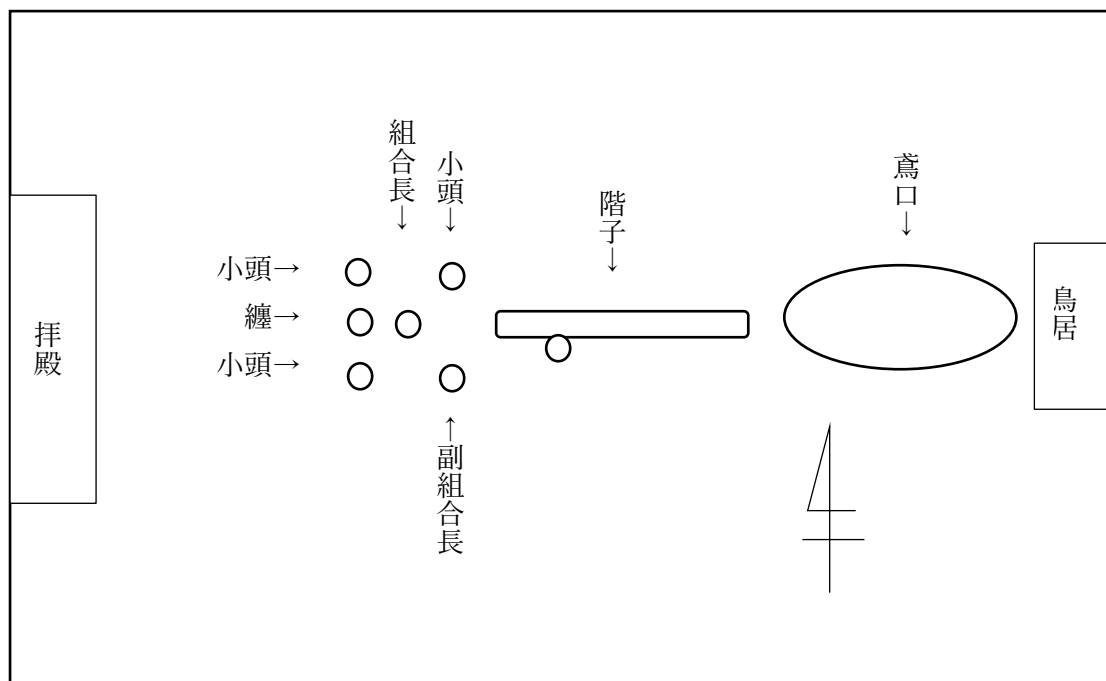


松原神社で階子乗り (令和六年一月二日、鳥居撮影)

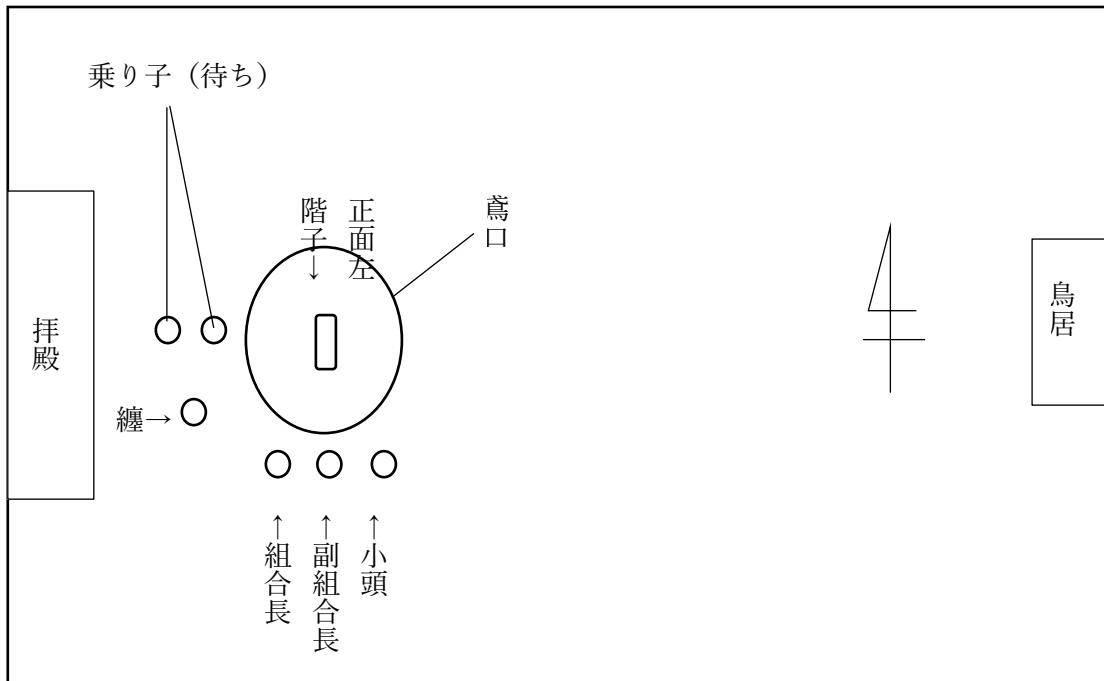


松原神社境内太子講(令和六年一月二日、鳥居撮影)

報徳二宮神社・行列並模式図



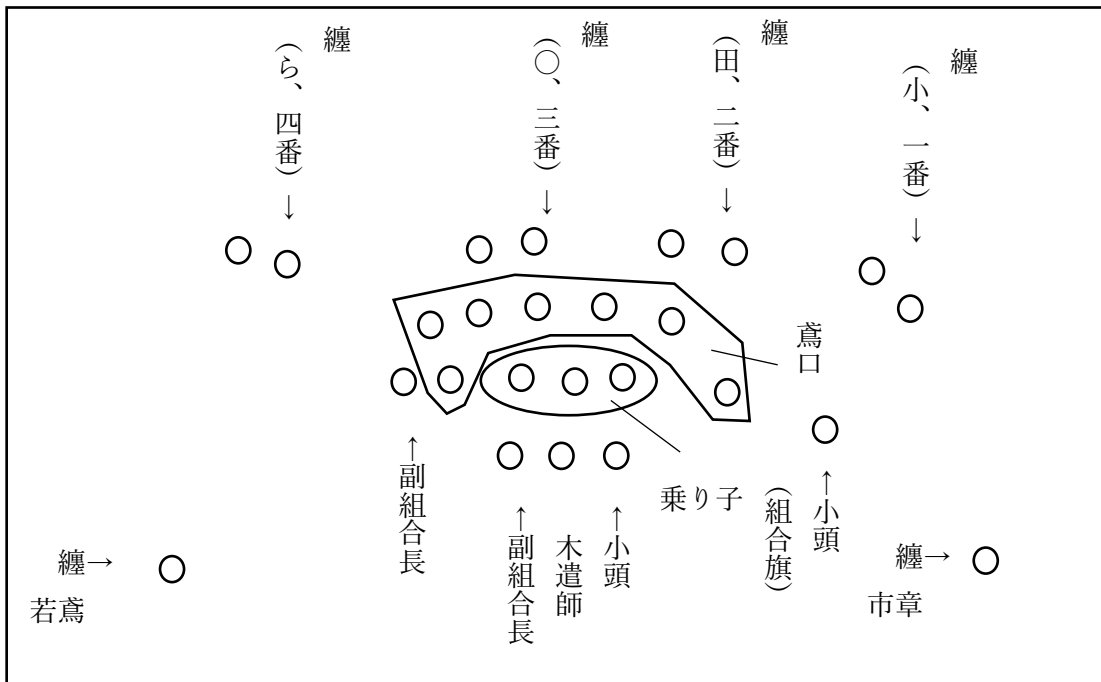
報徳二宮神社・行列（令和六年一月一日、鳥居撮影）



報徳二宮神社・階子乗り位置模式図



報徳二宮神社・行列（令和六年一月二日、鳥居撮影）

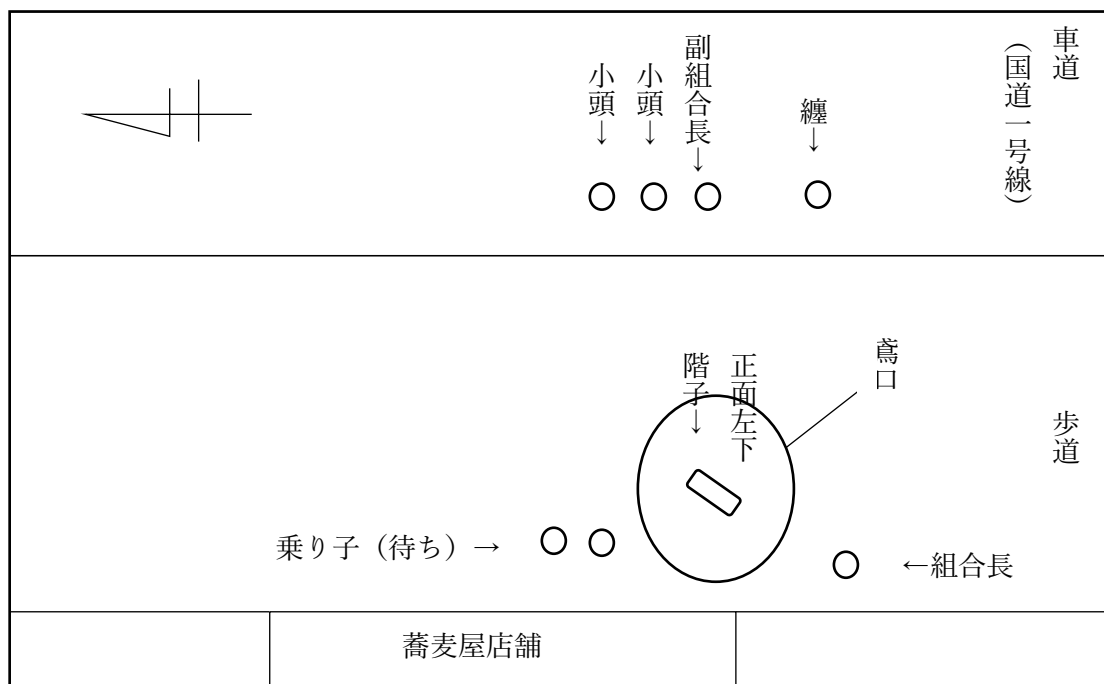


出初式会場 木遣と纏振り位置模式図

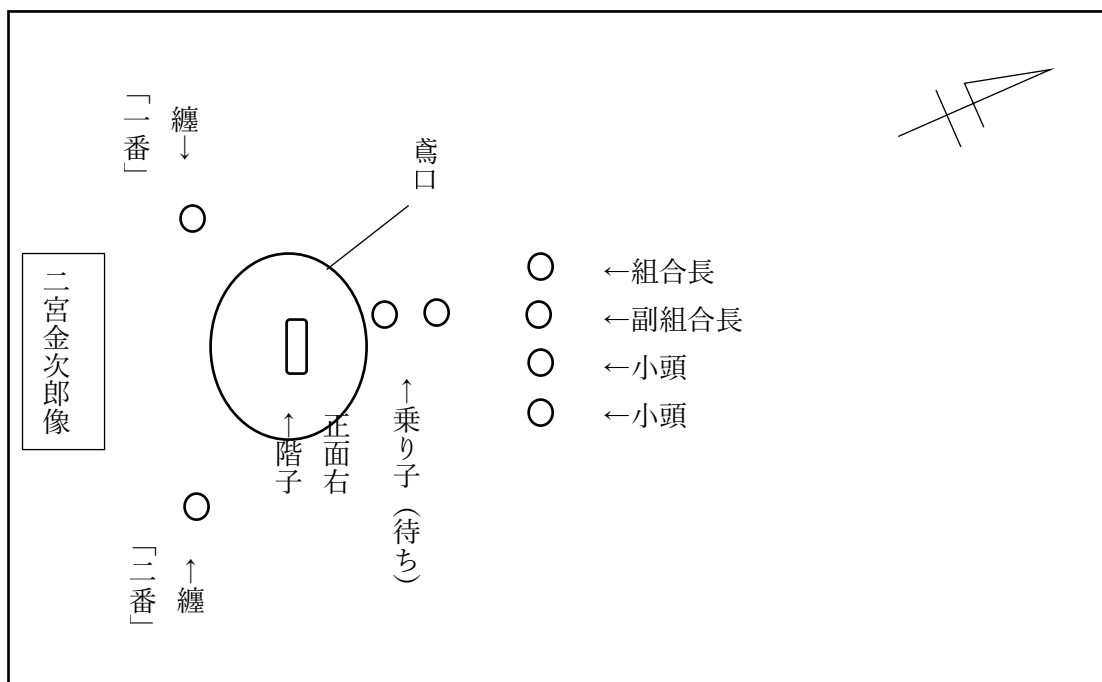


木遣と纏振り (令和六年一月二日、鳥居撮影)

蕎麦屋・正庵（小田原市本町一丁目九一―一九）階子乗り位置模式図



正庵前の階子乗り（令和六年一月一日、鳥居撮影）

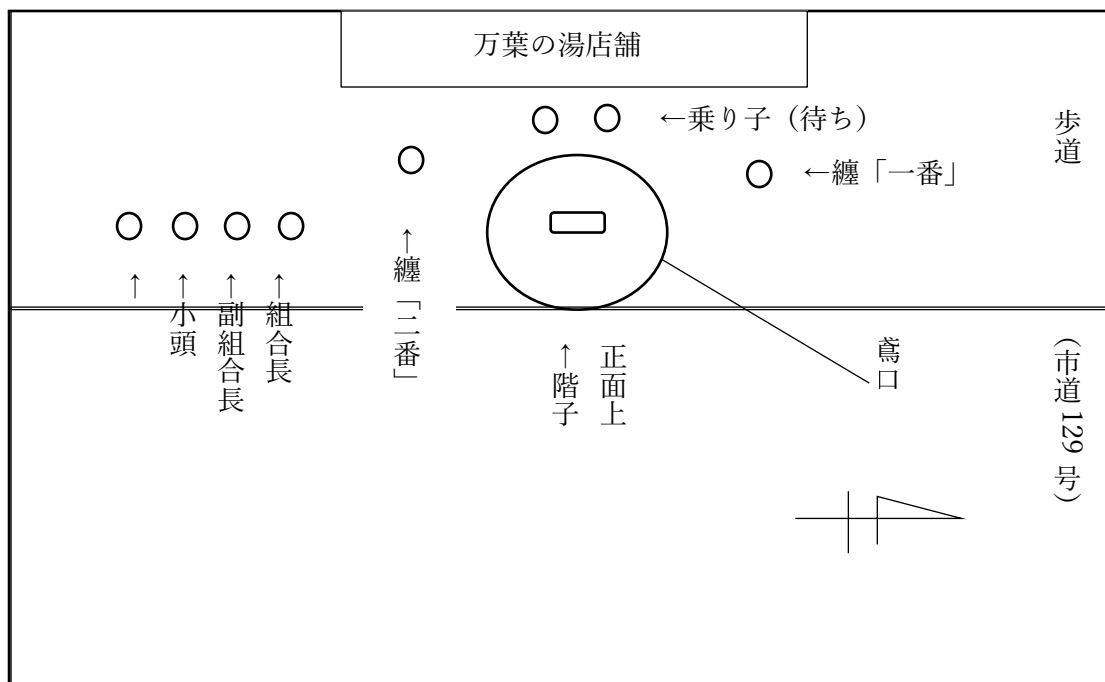


ミナカ・階子乗り位置模式図



ミナカ・階子乗り (令和六年一月二一日、鳥居撮影)

万葉の湯・階子乗り位置模式図



万葉の湯・階子乗り (令和六年一月二日、鳥居撮影)

9-1-2 練習、階子造り・写真

纏振り練習（令和五年四月二四日、保坂撮影）



木遣練習（令和五年四月二四日、保坂撮影）





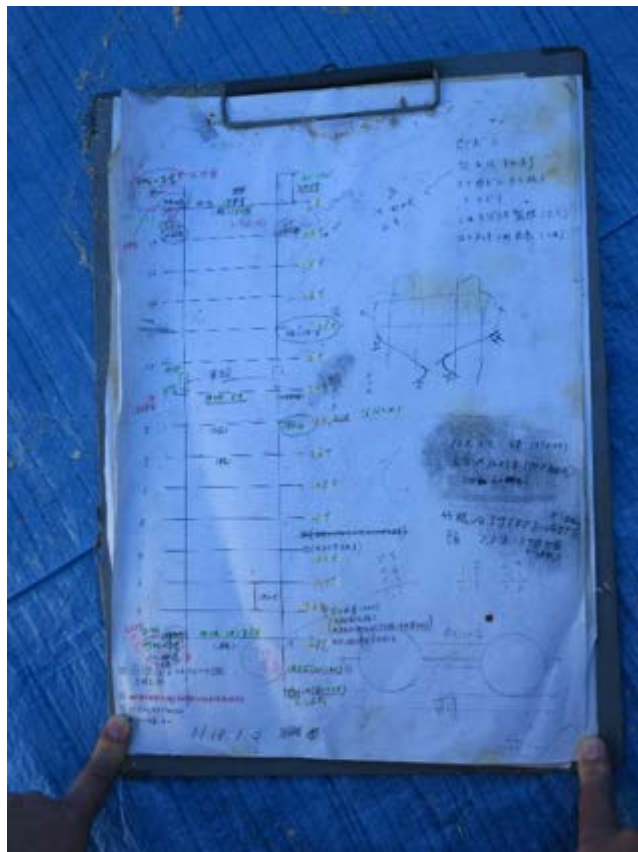
木遣練習（令和五年一〇月一七日、鳥居撮影）



階子乗り練習（遠見）（令和五年一二月五日、鳥居撮影）



階子造り（令和六年一月四日、保坂撮影）



階子図面（令和六年一月四日、鳥居撮影）



行列と纏振り（国際通り、令和六年五月三日、鳥居撮影）

9・1・3 小田原北條五代祭り・写真



纏振り（三の丸小学校前、令和六年五月三日、鳥居撮影）



9-1-4 古式消防関係石造物・写真
 木遣塚（石灯籠、昭和四一年（一九六六年）四月建立、松原神社境内）



石造真棒（大正一四年（一九二五年）四月建立、松原神社境内）

9-1-5 階子乗りの技

(令和六年出初式での階子乗りの技)

カタカナ…小田原での呼称

(ひらがな・漢字)…参考呼称『仙台市文化財調査報告書第23集 仙台消防階子乗り民俗文化財調査

報告書』小川建設「梯子乗り」ホームページより)

・ホカケ(腹亀↓肝つぶし↓逆さ大の字↓帆掛)

(1) ハラガメ(二本腹亀)



(2) キモツブシ(肝つぶし)



(3) サカサダイノジ(逆さ大の字)



(4) ホカケ(帆掛)



・シヤチ (鯨) (鯨↓逆さ大の字↓胴鯨)
(1) シヤチ (鯨)



(2) サカサダイノジ (逆さ大の字)



(3) シヤチ (胴鯨)





(2) ハラガメ (一本腹亀)



・カントン (枕部) (枕部) (枕部) ↓ 腹亀 ↓ 肝つぶし
(1) カントン (枕部)



(3) キモツブシ (肝つぶし)



(2) ハラガメ (一本腹亀)



・ハツソウトビ (八艘飛び) (八艘飛び↓腹亀↓肝つぶし)
(1) ハツソウトビ (八艘飛び)



(3) キモツブシ (肝つぶし)



(谷覗き)



・ウグイス (かなびき一芸 ↓ 谷覗き ↓ 途中邯鄲)



(途中邯鄲)



・ニホンドオミ (二本遠見)



・トオミ、イッポンドオミ (一本遠見)

「技を形成する型(便宜上「型」と呼称) 頂上型



・ハラガメ (二本腹亀)



・ハラガメ (二本腹亀)



・セガメ (二本背亀)



・セガメ (背亀)



・キモツブシ (肝つぶし)



・ヒザドメ (膝留め)



・ホカケ (帆掛)



・サカサダイノジ (逆さ大の字)



・シャチ (胴鯨)



・シャチ (鯨)



・ハンソウトビ (八艘飛び)



・カンタン (枕邯鄲)



・(谷覗き)



・(かなびき一芸)

途中型



・(足首留)



・(途中邯鄲)



・ヒザドメ(膝留め)



・ 出初式のはしご乗り（撮影年不詳、お濠端通り、小田原デジタルアーカイブ）



・ 出初式（一九五八年、お濠端通り、小田原デジタルアーカイブ）



・出初式階子乗り（技・釣亀、昭和三〇年代、個人蔵）



9-1-7 衣装
・組合長(頭)



・副組頭



・小頭



・若鷲



・ 鷹口 (カギ)



・ 乗り子



年寄



纏

9・2 鳶職木遣曲目・歌詞

9・2・1 鳶職木遣曲目

「きやり集」木遣保存会・木保睦編、一九五七年

曲目 歌詞前の題名

- | | | | |
|----|----------|------------|------------|
| 一 | 梶 | 梶(てこ) | (中間) |
| 二 | とびおけ鳶おけ塚 | | (中間) |
| 三 | 五尺 | 五尺手拭程よく染めた | |
| 四 | 駅路 | 駅路 | (中間) |
| 五 | 蝶々花 | 蝶々花 | |
| 六 | 五萬石 | 五萬石 | |
| 七 | 三河嶋 | 三河嶋 | (中間) |
| 八 | 鎌倉 | 鎌倉 | |
| 九 | 布目 | 布目 | |
| 一〇 | 遠鐘 | 遠鐘 | |
| 一一 | 軽井澤 | 軽井澤 | (中間) |
| 一二 | どん志よ目 | どんしよめ | |
| 一三 | 野曾木 | 野曾木 | |
| 一四 | 全送り | 野曾木送り | |
| 一五 | 八津志よ芽 | さんこの節 | 八津志よ芽 (中間) |
| 一六 | 小車 | 小車返し | 小車 (中間) |
| 一七 | | 小車返し | |
| 一八 | さん志よの木 | | |
| 一九 | 黒鐘 | 清念寺 | 黒鐘 (中間) |
| 二〇 | 湊 | みなと | |
| 二一 | ゑ志 | えし割 | |
| 二二 | 酒田 | 酒田 | |

- | | | | |
|----|----|-----|---------|
| 二二 | 田歌 | 田う奴 | (中間) |
| 二三 | 田歌 | 田歌割 | |
| 二四 | 日光 | 松坂 | 日光 (中間) |

「きやり集」木保睦編、一九六五年

| | | |
|----|---------|---------|
| | 曲目 | 歌詞前の題名 |
| 一 | 梶(手古)子 | 「手古」てこ |
| 二 | 駅路 | 駅路 |
| 三 | 三河嶋 | 三河嶋 |
| 四 | 野曾崑 | 野曾崑 |
| 五 | 鎌倉 | 鎌倉 |
| 六 | 五尺 | 五尺 |
| 七 | 布目 | 布目 |
| 八 | 小車 | 小車 |
| 九 | 小車返し | 小車返し |
| 一〇 | 軽井澤 | 軽井澤 |
| 一一 | 蝶々花 | 蝶々花 |
| 一二 | 五万石 | 五万石 |
| 一三 | 遠鐘 | 遠鐘 |
| 一四 | 黒鐘 | 黒鐘 |
| 一五 | 山椒の木しおり | 山椒の木しおり |
| 一六 | どん志よ目 | どん志よ目 |
| 一七 | 野曾崑送り | 野曾崑送り |
| 一八 | 鳶掛塚 | 鳶掛塚 |
| 一九 | 酒田 | 酒田 |
| 二〇 | 港 | 港 |
| 二一 | 田歌 | 田歌 |
| 二二 | ゑ志 | ゑ志 |
| 二三 | 日光 | 日光 |
| 二四 | 八津志よ目 | 八津志よ目 |
| 二五 | 松坂 | 松坂 |

録音データ・木保睦制作、一九七二年

| | | |
|----|--------|----------|
| | 曲目 | 読み |
| 一 | 真鶴・手古 | テコ |
| 二 | 五万石 | ゴマンゴク |
| 三 | 五尺 | ゴシヤク |
| 四 | 蝶々花 | チヨウチヨウケ |
| 五 | 駅路 | エキロ |
| 六 | 東金 | トオガネ |
| 七 | 布目 | ヌノメ |
| 八 | 三河島 | ミカワシマ |
| 九 | 鎌倉 | カマクラ |
| 一〇 | さん志与の木 | サンシヨノキ |
| 一一 | 軽井澤 | カルイザワ |
| 一二 | どん志与目 | ドンシヨメ |
| 一三 | 湊 | ミナト |
| 一四 | 酒田 | サカタ |
| 一五 | 黒鐘 | クロガネ |
| 一六 | 小車 | コグルマ |
| 一七 | 小車の返し | コグルマノカエシ |
| 一八 | 八津志与芽 | ヤツシヨメ |
| 一九 | さんこの節 | サンコノフシ |
| 二〇 | 野曾木 | ノゾキ |
| 二一 | 野曾木の送り | ノゾキノオクリ |
| 二二 | 鳶掛塚 | トビカケヅカ |
| 二三 | せいねんじ | セイネンジ |
| 二四 | 田歌割 | タウタワリ |
| 二五 | 絵師割 | エシワリ |

二九 二八 二七 二六

松坂 日光 田歌 絵師

マツザカ ニッコウ タウタ エシ

①『きやり集 改訂版』、発行小田原木遣保存会、木保睦、昭和三十三年九月（ガリ版印刷）



木遺目次

日本無形文化財指定

| | | | | | |
|-----------|------|----|------|------|-----|
| 陸 | 伍 | 四 | 叁 | 貳 | 壹 |
| 五萬石 | 蝶々花 | 驛路 | 五尺 | とびおけ | 挺 |
| 尾拾 | 貳拾 | 拾 | 仇 | 鉢 | 質 |
| 輕井澤 | どん志目 | 遠鐘 | 布目 | 鎌倉 | 三河嶋 |
| 八拾 | 七拾 | 六拾 | 五拾 | 四拾 | 叁拾 |
| 栗鐘 | どん志木 | 小車 | 八津志芽 | 全送り | 野曾木 |
| 老念寺 | | | | | |
| 南印 | 貳拾貳 | 貳拾 | 壹拾 | 拾 | 九拾 |
| 南印 鶴牛師 | 日光 | 田歌 | 酒田 | 九志 | 添 |

挺 (七二)

(中間)

駅路

(中間)

鹿嶋立ちかして其の日本橋。

捨を振り出す岳川

返一
岳川より振り出す捨を

かあしりまふこ

元川橋へやりや川ゆき
捨を振り出す岳川
拾をのせり人捨を振り出す岳川
一約三分

○勾の梅次通句を越えての篠田名代の外郎店
○暮小の小田原堤灯つけて明日は箱根を馬下越す
○箱根小にも名残み掛りる智我の守神

小田原木造保存会
木保睦

蝶々花

小田原木造保存会
木造保存

蝶々花

御世は目虫度。若松磯よ枝も栄えて葉も繁る
本捧より起す

こか
御世
ええ
出
度
え

若
あ
え
え
え
え
え

あ
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

え
え
え
え
え
え
え

棒七本 (約三分二十秒)



三河嶋

(中同)

御世は目出度の若松様と枝も栄えて葉も繁る

本棒 起下

御世は目出度^{おほいさ}はあしち^{あしち}、りやあやあしちこ
おれはあしちの^{おれはあしち}若松^{わかし}ういええしちええしちええしちええしち
ええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしち
ええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしち
ええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしちええしち

棒八本

(約三分三十秒)

峯の小松にしななるあけて

谷の流水下 龜遊ぶ

此ふこの町のお紺の宅付

油しめぎの音でする



木保陸

布目

向の小山に光るは何も

布目小山のぬりかん

はあん向の小山のぬりかん

リやあ向のぬりかん

笠まは柄ぬりかん

えは笠まは柄ぬりかん

えは笠まは柄ぬりかん

えは笠まは柄ぬりかん

えは笠まは柄ぬりかん

向の小山に光るは何も

ぬりかん布目小方のぬりかん

布目小方のぬりかん

一夜かりらども主人共に

棒八本(約三分厚)

わーちやあ、これこれ、まかたも、どおや

棒 (約七分)

何処かしやうぬか云ひ初めた一夜泊り忘其の方
心はひか水は軽井澤
一夜泊り忘其の方心はひか水は軽井澤

花も色々はぬ人忘や之や之百合の花、桔梗、
やるやあ、な下忘こ、くらり咲いぬや藤の花

昭和三十三年九月



あんしあわ

上、うは、の、あ、ひ、な、あ、と、お、ひ、取、え、は、あ、あ、れ
見、全、勢、下、な、あ、、と、は、あ、、
川、之、水、見、わ、は、ん、こ、う、ひ、お、下、こ、ひ、お、あ、し、也
う、之、の、見、と、は、ひ、さ、は、之、見、え、と、ひ、也、あ、は、れ
え、、、、、中、を、也、か、、の、之、は、也、ひ、之、見、見
事、を、る、の、け、り、と、ち、ひ、あ、は、れ、也、あ、水、は、な、は、れ、
あ、下、と、木、か、、、、の、也、あ、水、才、之、は、水、は、わ、は、れ
は、あ、ん、こ、は、ひ、、、お、下、こ、ひ、え、木、お、し、う、え、は、の、と
は、ひ、、、さ、は、え、見、、、と、ひ、也、あ、、將、本、え、、
、さ、ひ、こ、え、の、か、、、ひ、た、、、あ、ら、あ、、、ら、あ
の、一、え、、、、ひ、よ、の、か、、し、ひ、、、に、一、ひ、に、の、一
て、一、え、、、と、か、ひ、ひ、え、一、也、あ、水、一、な、一、、あ、一
と、一、か、、、、也、あ、水、一、こ、一、水、一、わ、一、は、ん、こ
一、ひ、、え、か、一、こ、ひ、え、一、か、し、也、ひ、え、一、の、

昭和卅二年九月

木保隆

与一以、さ一え一、
 んしん当ち、あ、あ、
 かりり、あ、水、
 ろかりり、あ、水、
 水、水、水、
 は、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、
 な、あ、あ、あ、
 水、水、水、
 一、あ、あ、あ、
 与、あ、あ、あ、

棒

場合により違ふの不明

(時間)

上同シナリ

昭和廿二年九月

小田原木遣保存会 木保睦

野曾木送り

えんならやけ茶を送りませう

えんなら兄に返しませう

か、く、い、か、ん、な、あ、ら、あ、い、ま、さ、り、ま、あ、い、ら、ふ、

か、く、く、い、か、ん、な、あ、ら、あ、い、ま、さ、り、ま、あ、い、ら、ふ、

い、く、な、に、か、さ、あ、い、し、な、さ、あ、く、ん、あ、い、ら、ふ、

い、く、じ、あ、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、く、ん、あ、い、ら、ふ、

い、く、じ、あ、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、く、ん、あ、い、ら、ふ、

い、く、じ、あ、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、く、ん、あ、い、ら、ふ、

い、く、じ、あ、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、く、ん、あ、い、ら、ふ、

あ、い、さ、あ、い、く、の、あ、い、く、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、

あ、い、さ、あ、い、く、の、あ、い、く、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、

あ、い、さ、あ、い、く、の、あ、い、く、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、

あ、い、さ、あ、い、く、の、あ、い、く、い、え、く、ん、あ、い、ら、ふ、

野飛舟九月

梓七本

(約四十分)

木保睦

八津志と茅

(中間)

也あ、志とめえ也あ、志とめえ、
 こお川ゆゑ、
 元えええ、
 こおのんこの^{たひ}ね◎、
 心、也あ、あ、水たの川前あ、え、◎、
 か、な外あ、らまか、(以下野曾あふし)
 捧◎本
 (約志分五十五秒)

老、
 たのたひ、
 ち、
 しよ、
 十、
 あ、
 い、
 ち、
 あ、
 よ、
 お

昭和九年九月吉日

小田原木遺保存会

木保睦

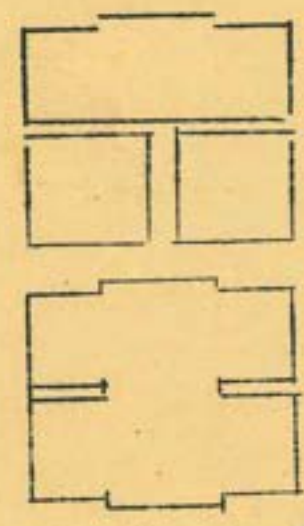
か、い、ん、こ、の、お、回、か、い、ふ、し、か、あ、ま、
二、お、と、た、に、い、ま、は、水、巾、さ、あ、の、お、持、た、志、や、
え、ん、あ、ら、あ、は、水、巾、さ、あ、の、お、持、た、志、や、
あ、ん、回、志、さ、い、わ、あ、ご、あ、ら、あ、り、え、え、え、
あ、ん、あ、い、い、あ、回、え、あ、い、あ、り、え、え、え、
あ、ん、あ、い、い、あ、回、え、あ、い、あ、り、え、え、え、

棒六本 (約二分二十秒)

小農木道保登

木保陸

昭和七年九月



小車 (申間)

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

御世は目出度の若松様と枝も飲えて菜も繁了

日本... 小田原... 木保隆... 山口... 晴美

しんま... 秋は木... 魚も通... 静... 目に見えぬ

あ... 水... 牛... 引... 出... 水... 見... ぬ

昭和九年九月吉日

△今度御座らば痔一十疔したもれ
 伊豆の御山のなごの茶也

若睡改め

木保睡

あ、ちえ、人、あ、あ、あ、え、え、葉、
 、あ、も、あ、川、え、い、ゆ、え、る、う、葉、し、
 ちえ、之、^①、ち、あ、葉、ち、し、け、る、ち、
 之、^②、^③、^④、え、え、^⑤、志、ち、あ、ま、あ、志、ち、あ、ち、
 之、^⑥、^⑦、^⑧、^⑨、^⑩、^⑪、^⑫、^⑬、^⑭、^⑮、^⑯、^⑰、^⑱、^⑲、^⑳、^㉑、^㉒、^㉓、^㉔、^㉕、^㉖、^㉗、^㉘、^㉙、^㉚、^㉛、^㉜、^㉝、^㉞、^㉟、^㊱、^㊲、^㊳、^㊴、^㊵、^㊶、^㊷、^㊸、^㊹、^㊺、^㊻、^㊼、^㊽、^㊾、^㊿、

以下、^㉞、^㉟、^㊱、^㊲、^㊳、^㊴、^㊵、^㊶、^㊷、^㊸、^㊹、^㊺、^㊻、^㊼、^㊽、^㊾、^㊿、

棒拾本 四分二十秒

亀遊ぶ (阿比留と)

昭和二十九年九月吉日

発行 小田原本遺保存会

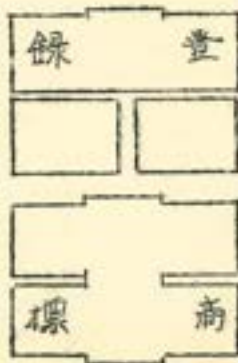
きやり集 改訂版

若膝改め

木保膝

販売品

木保膝の許可無くして複製嚴禁す



全 全 全 全 全
 刷 着 着
 和 揚 熊
 日 升 澤
 吉 賀 賢
 郎 之 次
 遠 藤 晴 美
 永 升 守 次
 柏 木 秀 天

者任責



大
手 吉郎

共
口 晴美

大
官 町 賀之

銅
町 賢次

御
幸 共 守次

馱
前 禾乃

②『ぎやり集』発行小田原木保睦、昭和四〇年頃（手書き）



登録 寶 商標



踏まれても根強く忍のべ道芝も やがて花咲く春は来るらん

(故 馬越船平翁曰く)

過去を返り見て

慨歎すべからず

将来を思ふて

失望する勿れ

タカラ帳簿

©倒されし竹はいつしかのび上り、倒せし雪は消えてなくなる

ペン毛筆両用紙

手直して
 よおいやあ、れーてこおせーえい
 えいえ、、ほお、いやあ、れーえ、さ
 らばあーやあ、いるーうはえ、いやー
 あ、らーよーおよーお、よーお、いさーあー
 せーえ、、よおいやーよおうーやーあー
 あれーよーはーあーりやあ、れーり
 やねえーいーあ、べーえーやあ、れーえ、し
 めーえ、ろやあ、れーえ、、え、、やあ
 ああ、らよーおよーお、ほーいせーえ、、

タカラ帳簿 十三号

| | | | | | | | | | |
|------|-------|------|--------|-------|-------|-------|------|-----|--------|
| 40 | 39 | 36 | 32 | 30 | 26 | 18 | 16 | 4 | 1 |
| 輕井澤。 | 小車返し。 | 小車。 | 布目。 | 五尺。 | 鐮倉。 | 野曾虎。 | 三河島。 | 駅路。 | 挺(手古子) |
| 80 | 76 | 73 | 70 | 66 | 62 | 54 | 50 | 46 | 44 |
| 港。 | 酒田。 | 真掛塚。 | 野曾虎送り。 | どん志目。 | 山椒の木。 | 黒鐘。 | 遠鐘。 | 五石。 | 姥ヶ花。 |
| | | | 11 | 10 | 10 | 10 | 9 | 4 | 82 |
| | | | 2 | 6 | 2 | 0 | 0 | 88 | |
| | | | 絵師返し。 | 清念寺。 | 松坂。 | 八津志目。 | 日光。 | 鳥志。 | 田歌。 |

いやあ、れーえよあ、いーさあやあ、れこれ
 わー[○]やーれこれわーあそーおれーえはあー
 え、いえ、よいさやあれこりや[○]

ペン毛筆両用紙

タカラ模写 十三号

| | |
|----------------|-------------|
| 一、じめわーあまいぎー | 一、めえこぞーたーくー |
| 二、たのみーまあこすー | 二、こーいこおかけろー |
| 三、こくろーおながうー | 三、こーいこおかけろー |
| 四、りまがいーながうー | 四、どなたもたのめます |
| 五、ざりこーあこわー | 五、ただにぎやかに |
| 六、あともーさきとー | 六、りまがいちどに |
| 七、やーあれーこーれわー | 七、りまがいながうも |
| 八、もーんこつーもー | |
| 九、あこーおぎーなまがうー | |
| 十、じまーさーいーなくーはー | |

駅路

鹿嶋立し其の日本橋

槍をふり出す品川 枕

色の品川清のさめず

ふこが降りそな鈴ヶ森

鈴ヶ森からおつづら馬 枕

引いて大森和申散

君母大森見事にかざる

諸国みやげのわら細工

ペン毛筆両用紙

走龍参四五六郷の渡し

流れ渡りて川崎 枕

文の川崎やる神奈川よ

思ふ程ヶ谷戸塚宿

戸塚泊りじやまた日もあひ

駒を早めて葎沢へ

昨夜葎沢 枕 平塚 枕

路は大磯小磯かし

虎を見たさに大磯かけ

行きつもどりつ七もどり

タカラ帳簿 十三号

りんき深いが大磯の虎よ

曾我の十郎の身をやつす

にほひ梅沢酒匂を越えり

諸国名代の外郎在

暮れり小田原燧灯つけり

明日は箱根を馬で越す

箱根山にも名所が土産る

曾我の五郎の守神

箱根峠の八幡を越えり

曾我の五郎の力石

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

伊豆へ廻れば名所はあれど

それなもどりの三島道

私しや三島の明神称へ

酒は沼津と願掛けた

原と吉原自酒名所

飲んでもかん原由比沖津

飲んでもかん原由比気げん下

沖津ころびつ干鳥足

由比の口説が我しややくの種

明けの鐘までつひ沖津

江尻とじりとかからんた縁か

未は府中で夢うつゝ

江尻府中は手づくまりこ

なら付岡部の蓐枝よ

岡部見とさえ花美しや

咲いと折りたや蓐枝を

島田くすしとうかくまよひ

私しや首たけ大井川

大井川から急いで来たか

ととも馬には金谷宿

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

島田金谷の付たごや娘

えがほ日坂のわらび餅

思ひ掛川文取り落し

ちらと袋井見付宿

天滝渡り一川岸見れは

松が見えます浜松か

私しや遠洲浜松育ち

米の成る木は私しや知らぬ

遠洲浜松根皇とすれは

磯の小波がゆりあこす

遠洲浜松舞坂おどり

顔を荒丹の平すがよ

荒丹かみならう油氣なした

わらでたばねて結む髪

白須顔して氣ぐすめらしい

まはニ川ニ心

我が娘付名もニ川よ

顔も器量も吉田宿

ニ川しやんすなうたぐり深い

さ程いやなら吉田宿

吉田通れは二階でもねく

しかも鹿の子の振袖よ

むだな由けん赤坂駅よ

はこぶ蒜川やほな宿

三味の手ほどき岡崎女郎衆

ちりゅうなる身で面白い

ちりゅう朝立ち笠寺越え

なる身なわで袖しほる

なる身ならぬ身目かど下知れる

晴れて乗りたや宮の舟

官付晝舟桑名は夜舟

客は居つづけ四日市

伊勢へ歸れば名所は有れど

其れはもどりの石薬師

石薬師じやと云ふた娘

庄野の悪さに虫が付き

庄野の亀山早せき上げる

きりと宿どりは坂の下

坂の下なら一夜もいやよ

朝の目ざめは鹿の声

ペン毛筆用紙

タカラ帳簿 十三号

雨も降らずに鈴鹿の社

あいの土山雨が降る

水口車でだまるとしても

石部金古金かぶと

ほしが赤けりや草津と云ふか

私しや大津下暮したい

たむのつかれは京九重に

咲いて都は花盛り

五拾参次つひなく終一

明日の歸りは中仙道

やれ鹿嶋をいれりえ、立してえ、こゝろ。
 其の日本をいれりやれわんせー。
 さんいれり出す品川よー。やれ品川よ
 えいれりえり出す槍を。
 さんいれり出すうー品川よ。

棒 五本

ペン毛筆 両用紙

タカラ帳簿 十三号

鹿嶋を立して其の日本を

槍をいれり出す品川よ

品川よいれり出す槍を

槍をいれり出す品川よ

三河島

御世は目め度の若松称よ

枝も栄え~~て~~いよ葉も繁る

山峯の小松たしなつるかけ~~て~~

谷の流れでいよ亀遊ぶ

此~~地~~^此が~~武蔵~~^{武蔵}此~~所~~^所のお紺の電は

油ら~~め~~^めぎの音がする

本俸より起す

御世は目出^め度の^はありき^りやあ^やあれ

こおれわあ^いね^ー若松うい^ええ^ーえ^ー

称よ^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^え

枝も栄^えて^はありき^りやあ^やあれ^こ

おれわあ^いね^ーい^よ葉も^おい^えい^えい^えい^え

繁る^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^えい^え

俸 八本

野曾堯

げにやはやしが見事成る

前唄

一皆れきくか集りて

さいこくたこのひまうしに

賣た調子が見事成る

唄しんころやとろりとろり

とろりとろりとつく成らば

松に成りたや有馬の松につたに

巻かれてねて御座る

ペン毛筆両用紙

梅の匂ひを桜に持たせ

花を柳に咲せたい

梅はにほひも桜は花も

人は見目よりたゞ心

老しに黒鐘車に乗せて

一こで引出す御城内

花は上野の柳は銀座

月は隅田の屋形舟

花は上野かもみじは染井

松は根岸のおぎの松

タカラ帳簿 十三号

花はみよしにもみじは立田

松は唐崎一つ松

花にならならん吹はよしやれ

花はよけれど賣は成ぬ

色で身を賣るすいかでさえも

中にや苦勞の種がある

松は唐崎一つは塚

みかん紀の国栗丹羽

さても見事な小田原つじ

元は箱根の山育ち

娘したがる親達までも

させて見たがる針仕事

駒にふまれし道芝さえも

露に一夜の宿を貸す

風にもまれし唐竹さえも

小鼻に一夜の宿を貸す

さてもめずらし八犬が島

根からはえたか浮島の

水に流れし浮草さえも

ほたるに一夜の宿を貸す

よーおーおーれえしえいえいヤーあーこーえー
 えー、、、○やあどきおこーとおーはーえいや
 あーさーこれはいやさーのせ○おー、うけーはーあ
 よおーいぞーおー、、、やーれーどあーどなーたー
 とーねー○ごくーろーながあらーとー○えーたのーえい、
 まあーしゃうー○おーいなーありよおいねえーやーあ
 れーなー、ーなあ、、、よーよ、、○やーあ、れ
 これーわりはんこういえおーこいえーおしやう○
 よーい、さーえーえよいやあー○え、、、げにや

ペン毛筆用紙

タカラ帳簿 十三号

おー○えはやしがえー○見事なる○うーうーよ
 おいねえーやあれーなー、あーよーおー、○や
 あれーこーれーわーはんこーい、えおーこいえーお
 しゃうえー○よーい、さーえー、よいやーあ、れー
 はーあんしん○とろーや○あ、あれこりやね○とろーおりー
○やあ、れこーおれはーいねはーあん○とおろおりー○やあれこりや
 とろーおりー○やあ、れこーれはーいね○えーえとおろおり
 いーいお○ーおえとおりいーいと○えー、つくーうーな
 あーらーあ○あばーあーよおいねえーやあれーなーあな
 あ、あーよー、、、○やーあれこーれーはーあ、はん

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿

十三号

こーいゝおーおこいおーおしやうーお
 ーおいゝさあゝおーゝよいやあーね

鎌倉

○鎌倉の御所の祝ひに

庄屋さんの娘が酌に出た

酌に出たなら肴よりも酒よりも

庄屋さんの娘が目についた

○目にも付いたなら連一行かんせ

何處までも女子はかほうの縁じゃ

縁じゃものじゃとたとへ野の赤山の中

どんな心苦もいとやせぬ

○舟の船頭象は何着てねやる

とばを敷寝にかじ枕

いかり下して反綱下げ

月星を眺めて夜を明す

○扱七が初にしのんで鳴子色の

小梅で日が暮れた

日が暮たなら梅を枕にらんかん影に

月星ながめて夜を明す

○清水御寺の清水坊称は

やぶれ法衣にいよやぶれ笠

それと誰ゆえあの栲姫何時か一度は目ぐり

逢すにいよ置物が情しらすの栲姫

○相模横山照一の姫は事のためと

あの車引く

それも道ゆえいよ小栗殿くみし清水姿を寫し前掛

たすきと取ひき無りれと誰ゆえ小栗殿

本碁より起す

餅倉のなあ、こーなあ、こーなあ、こーなあ、こーほいせ
 ち所所の祝ひに○庄屋さんあんのお庄屋さんのやあれ
 こりやね庄屋さんの娘が○しゃああ、しゃくーにい、
 出た○酌に出たならなあ、こーなあ、こー、○
 なあ、あ、こーほいせーちりち看よりと○これは
 酒よりも庄屋さんの娘が○めーち、ち、めーち
 ちーちにい、付いた○

碁八本

五尺

五尺手拭襦よく染めた

染めも染たまよ仲よく染めた

染めつくやしやにせ紫を

元の白地にして返せ

梅の下ははうの身が

小ぶなくわえてびくしやくと

御世は目出度の若松称よ

枝も栄えて葉も繁る

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

やれ五尺え、まだまだね○やれ五尺おー手

拭きりりやどうこい、これはいね○やーあれこりおの

おはーありおりやさいこおのはあ、にいわー。

やうれーよくやれ染めた○やーお、れーえい

わ、あいえーはあい、やはあやれこりやね○

穉五牛

布目

向ひ小山に光るは何よ

布目小萬のぬり笠なれよ

布目小萬のぬり笠なれは

一夜かりよともまさん共に

笠を忘れし峠の茶屋に

空がくもりしよ思ひ出す

向ふ通るは清十郎じゃ無か

笠がよう似たすげ笠か

笠がよう似た清十郎なれは

御伊勢参りは皆清十郎

神田鍛冶所に鍛冶屋はあれど

君の刀すよな太刀が無い

鐘をたいて長者に成れは

神田鍛冶所は皆長者

加賀の加賀所に笠屋は有と

君の召すよな笠が無い

はあへ向ひえー小山にえー光るは何によ
 はあやりやあやーあれ布目えー小萬の○えー
 ぬりかん笠よはーあやありやーいかあにい
 もぬりかん笠よはーあやりやーあ、れ布目
 えー小萬のえーぬりかん笠よはあやあ、
 りやー○よお、いよあ、いよおいかあ、さあ、
 あかあがさあよー○

秤ハ本

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

向ひ小山に光るは何よ

布目小萬のぬりかん笠よ

ぬりかん笠よ

布目小万のぬりかん笠よ

小車

却世は目出度の若松様よ

枝も栄えし葉も繁る

峯の小松にしな鶴掛し

谷の流で亀遊ぶ

朝の野に出し若菜を摘は

露で小妻が皆濡る

小袴濡しと心まで濡ぬ

妻と定まれば皆濡る

スミヤカ紙用紙

タカラ帳簿 十三号

却世はあーい、えーえやあ、れこれわいね。目出

度えいえいえー目出度のやあれこれわあ。これ

わ若えーよおい松。称よお、いなえーんやあ

れこりやあやーお。いよおーおぢやあやあ

よいねやーあれ枝。けーあ、もやあ、れど。いこ

れわあやあ、れこおれわあいね。栄えいえいえ。

えー栄えしやあ、れこれわーこれわ葉もお、え。

よーおい繁るやあ、れ、これわーわーあ、しめ

えーちかーあけえちかーよーよお、やあーあれえ

え。えーよおほいせえーやあれ、よおれえわやあ、

ペン毛筆両用紙

車返し

老ーさーりい、とあ、ーりわー^わ老いやあ、あれー
 これわーあ○あ、しめえ、ろかあけえ、ろー
 ーよお、、やあーれえーれ○ーよあ、ほい
 せえーやあれーよあ、いさーやれこれわ○ーやれ
 これわーあやれえわわーあえ、、え、、えーよ
 いさーやあれこりやね○

挿四本

いう、あ、のせ○い、よーおお、、えーれいれいやー
 ああ、ら○えーやはらんよあ、い、さあ、よあ、いさー
 あやあれこれわー○やれこれえわわーおんれ
 え、わあーえ、えいえ、、えよいさやーあれこり
 やね○

挿拾参本

タカラ帳簿

十三号

輕井沢

何處のしもうねが云ひ初めた一夜泊りの

其の方か心をしかれる輕井沢

花も色々

牡丹芍薬百合の花桔梗硬川菖撫子

ちらりと咲いたが藤の花

島も色々

三屯八丈に佐渡が島伊豆下大島江之島

お江戸下名高き向島

山も色々

妙義碓名に富士の山加賀下立山白山

越後下名を得し彌彦山

ペン毛筆両用紙

滝も色々

華嚴霧降霞見滝美濃下養老布引

紀州で湯の滝那知の滝

酒も色々

板見諸白男山君の召すのは菊酒

我等の飲むのは茶碗酒

舟も色々

孔雀鳳凰安電丸よ川で川市吉野

吉原通ひのちよきの舟

あのや姉さんちと又御意見申しませう

髪を島田に結ぶよりと心の島田をいやくと持て

タカラ横簿 十三号

おい、輕井老、そおりのやまおいとよおいとね。
 やれ、沢井、あやれこりやねと、お、はは、そお
 りや、あれどこのお、いしようねが。云え、え、初
 めたは、やあれや、おれは、はあ、一夜え、泊
 りしお、其の方え、心をひかれる輕井、沢井、はあ
 いや、はは、あやれこりやね。え、心をひかれる、輕
井、沢、はあやあれ、そお、れわ、は、一夜え、泊
 りしお、い其の方え、心をひかれる、輕井、沢
井、あ、い、はは、あやれこりやね。お、い、そお、ちや
 わ、あやあ、い、れ、え、まかせえろ、や、あ、

ペン毛筆両用紙

タカラ紙簿 十三号

れこれわあ、いね。 棒 十四本

何處のしようねが云ひ初めた一夜泊りし
 其の方が心をひかれる輕井、沢
 心をひかれる輕井、沢、一夜泊りし
 其の方が心をひかれる輕井、沢

蝶々花

御世は目出度の若松様よ

枝も栄えり葉も繁る

峯の小松に雛鶴掛り

谷の流で亀遊ぶ

沖に見ゆるは大黒船よ

丸にこづちの白帆が見ゆる

本齊より起す
ペン毛筆両用紙

タカラ板書 十三号

こかーあ、いげーはあやれこりやねーえやあ、こ、
 れ御世は。ええー目出えーい度あ、い、のーあえ
 え若あ、いまあ、あ、つえ。ー称よはーそりりや
 あえーんやあら枝もえり栄あーいえーええーい
 えーえいよあ、い葉もーえ。ー繁るはーそりりやあ
 え、ちよちよあ、けまうちよーけーそりりやなたあ
 ねーえ、のーこーこかーあ、いげえーでーえーえ
 え、ちよちよあ、けまうちよーあ、けーそりりやあ。
 しーこーお、めなーかのつなからーえーえよいやーあ
 あねーはーあやーあ、りやあーえーえ。ーこかー
 あ、いげー

橋七本

五 萬 石

五萬石でも岡崎様は

お城下まで舟がつく

沖に見ゆるは大黒舟よ

丸にこづちの帆が見ゆる

沖に見ゆるは丸屋の舟よ

丸に屋の字の帆が見ゆる

加賀の加賀町に笠屋は有れど

君の召すよな笠が無い

ペン毛筆両用紙

神田鍛冶所に鍛冶屋は有れど

君の召すよな太刀が無い

そとも見事な小田原つち

元付箱根の山育ち

タカラ帳簿

十三号

こーまんーごーくーうでーもーお、おかあざーあ
 きーいさまーわー。えーえよあい、こーのーおさー
 あんせ おーしろーしたあまーでーうう、うう
 うねがーあつうくうしよんがいなー えーやれこりやう
 うねが。ーあ、つうくうおしろーしースーまーで
 えふう、ううねが。ーあ、つうくうしよんが
 なーえーえよーお、よーあ、い。ーよー
 いこーのーあさあ、いせーえーまをあまーだーは
 ーやあきー。

棒六千

ペン毛筆両用紙

タカラ横罫 十三号

五万石でも岡崎称付お城下まで
 舟が着く舟がつく
 お城下まで舟がつく

車 鐘

車鐘の茂工門がせどでうが鳴く

何と云ふて泣く妻たこやめ恋じと

次も車鐘の茂工門が門のほりものけ

菊水桐は波に千鳥よ

拾七か柳の下でけたを織る

しの木が折れくたが廻らぬ

拾七か紅が相つけた夢を見た

目さめー見れば元の自げよ

ペン毛筆両用紙

タカラ板書 十三号

拾七か板屋の屋根へ轉げ来ー

誰か目さます君が目さます

拾七か舟のみよしに立寄

水にうつしー見たりけり

浅草の牛茶屋の娘花かともじか

花なれば一枝月しや宿のみやげん

六十六部かみかどにまけーあいと

しやく双と水晶のしゃづもかたに取れー

不詳

車鐘のなゝあはあんええーりーお、りやあ。なん
 べーえもーせえーこれわーあ茂工門がお。ーおいせ
 どでなあーはあんええーりーお、りやあ。なんべ
 ーえもーせえーこれわーあ茂工門がお。ーおいせどでせど
 おでえーうがあー鳴くなゝあはあんええーりやあ
 はーおんえーはあい、やーはあやれこりやあ。

橋六本

ペン毛筆両用紙

タカラ校簿 十三号

車鐘の茂工門かせどで

茂工門かせどでうが鳴く

何と云うてなく茂工門か妻の

茂工門か妻のやめ志しど

次に車鐘の茂工門か門の

茂工門か門の月りもいす

門の月りもいす菊水桐に

菊水桐に波た千鳥

里一 鐘

品川沖にも名所が御座る七つ八つ山浮洲の森

沖じや網を引く釣りの舟

茶屋の二階じや二上り端ハシの三味を引く

宵ヨじや若い衆が客の神を引く

鳥輪トリ中ナカ平ヘ八ハチ町チヨウ半ハンが舟を引くさ

隅田川隅田川とも名所が御座るに権現権現三三社社乳乳山山

三三に三三廻廻り四四に自自ひげひげ

梅若塚梅若塚には二二つ並並べし枕枕梅梅 土手土手の梅梅に竹竹やの波波

波波にゆられし都都真真かいと

ペン毛筆両用紙

タカラ歌簿 十三号

近江の湖水に名所が御座るせたの唐梅唐梅矢矢はせの渡渡し

せごの城城には石山石山寺寺さ

比良の墓墓雪雪に堅田堅田の落雁落雁一一つ松松

三科寺三科寺の鐘鐘のひびきで明明ける湖湖水水さ

咲いた桜桜になせ駒駒つなぐ駒駒が鳥鳥めは花花が散散る

花花が散散りても又又来る春春には芽芽をい出出す

とめし振袖振袖二度と咲咲くまいと

我が国国さ下下見見せたい物物は昔昔しや谷風谷風今今達達模模様様

ゆかしなうかし曾城曾城野野しのぶ

外外に無いやや松島松島ほとりに

明日は建方側建足場たぐる丸太かどねと成る

上では若い衆が六尺間飛にかけや打つ

下では頭取衆のちやを出したりさ

里王もすべりも御部屋に取られ里もじみえく紅で書く

苦勞人なら察してあくれも御部屋様

誰しも恋路は同じ事だよさ

何か不足で枕を投げたなげた枕にとかけ無い

もしも此の子にあたつたら何としよう

仲のよい時お来た子にやものと

御世は目玉度の若松様も枝も葉も葉も繁る

目のまも近く上下は鶴めが舞遊ぶ

廿十日高砂のち様とけあ様か亀にたまむれさ

いたこ糸島のまこもの中にあやめ咲くとはしほらじや

あやめによういたかきつけた

尺のまこもべ引く手になびけよさ

元唄
 よーおほいとおこはーよほいとこーねえーえ
 えやーおれわあいえーえ。はわーあ、れーえいえ
 いわあーいえーしめーえーろしめろーやーあれえ
 いえーえ。ーえよおほおいとおこはーよほいと
 こーねーえ。いえいえーえ。お、ーい
 ろお、がーあねーのおいえい。はーれわあ
 なーああや。あ、さいやさーやあせいえーえや
 あきとおせえーはあれわあんりやああ。ー
 くらおがあ、こ、ねーえーのおーえーえやま
 けりやあやまあーでもねーえー。よーほおい

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

とおこはーよほおいとこーねーえーえ、りーお
 おれわいえーえ。はわーあ、れえいえいわあ
 ねーしめえーろしめろーやあれえいえーえ
 よーほおいとおこはーよほいとこーねー

手唄

神八

いえーえい、え、お、ーい品川沖にも
 えーえいはあれわんなあ。あ、さーいやさ
 あやあせいえーえやつきとせえーはあれわんり
 やあ。、、、品川はーあいえーえー沖
 りや沖にいもおねー。えーえ名所が御座

るーうお、いなりあーなあ。七つーうい
 えーえー入つー片りやー入つ山あね。え浮州
 浮州の森よあ、いな。ー、沖じゃいえーえー
 え網を引くーう。、な、あ、えな、あ、う
 なうわなーうわーあよーお、^よりやあ。え
 ええいいよあ、釣釣りえ、この舟ーね、ちよ
 いーとおせー。えー茶屋の二階いーいぢやあ、え
 ええ、よ、よあ、いさーあよーあ、いさーね。ーえ
 ニ上りどーお、いつうーのーお、、、、三味
 を引くーう、う、ちよいーとおー。えーやーあれ

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

下では若ーい衆うがーあ、容の袖を引く。ー
 やあれたーあ、かーあ、な、あ、わー中入
 町ーお牛がー車を引く。ーよーあ、ほーお
 いとお、こーほーほいとーこーおーねえーえ
 えきーお、礼ーわあ、え、。えはわーあ
 あれーえ、い、えい、わーえーえ、しーめ
 えーろーしいめーえーろーやーあれえい。え
 えよおーほいとーおこほーよーほいとこー
 ねー

挿話六

山椒の木しおり

つんまかりしりかきさしへて午が引おす浅鶴丸よ

秋は木の葉をかき分け行けは

島も通はぬ山ほときす声はすれども目に見えぬ

紀州和歌の夏にも名所か御座るに権現ニに玉津島

一に権現ニに玉津島三にみよの根上り松

四に潮浜島一返えさぬ片男波

隅田川にも名所か御座るに権現ニに待乳山

一に権現ニに待乳山三にみ廻り

四にしらしげよ波にゆられし都島

ペン毛筆両用紙

タカラ製簿 十三号

長兵衛 〳〵が三人ござる中の長兵衛がきし打に

鐵砲かいてこわきざし差こし

きじの御山にきじ打にきじも鳴ばは打れまい

紀州街道の田んぼの江に御立成されし御地藏は

男が通ればあちら向いて御座る

女が通ればたこく笑ふ是かまことの色地藏は

まかーせーろーやーやれこりやなーこれわー
 んまやれこりややれこりやなーかやーおーろお
 ーかろーろかいをろー。ろ添ろーろはれわん
 せーろーろ午かがいろー。ろー引き出すーろーろ
 うなーあゝあゝなゝあゝなゝ。あゝなゝあゝなゝあゝう
 なうーなうわなーうわよーおゝおゝおゝやーあゝ
 あろーろいゝよーお清鶴ろーろゝろうゝよーあ
 おゝちよーいゝとせーろしめーろーおやーあゝや
 れこりやな秋はいーろーろゝおゝい木の葉おゝ

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

おーおゝいかきはけろー。おゝおい行けはあゝあゝこ
 のーお鼻りもやれこりややれこりやな。あゝあゝ通お
 おわあゝゝゝぬうーゝろーろ山ろーろゝ山仔と
 〇ろーとぎいゝすーろはれわんせーろゝ声ろー
 ろーろ。ろすれども目ろーろ目ろーろ目にーい。
 なゝあやあれ見ろぬうろーろしんがいをそおゝり
 やあゝあ。ろーろいゝよおこーおのーもっどーおゝもー
 なりけるーろ。ろーろゝおろーおゝゝいかりあゝあゝ
 よーおろーろゝせんじの木はあゝつーろーろん
 しよー。

秤拾五斤

どん志と目

箱根入里は馬下も越すが

越すに越されぬ大井川

島田金谷のはたごやの娘

なますもろとーちよこ出した

天竜渡りーいよ西見水は

松が見えま下兵松が

遠洲兵松廣いよで狭い

焼くくるはがニ丁建ぬ

ペン毛筆両用紙

タカラ模簿 十三号

吉田通水は二階でまねく

しかも鹿の子の振袖よ

坂は下るく 鈴鹿は雲る

あいの土山雨が降る

勢田の唐菰唐金ぎほし

水にうっりしせごの城

どりおんじよめーれどーおんじよーおめーれま
 かーせーれろやーあ、れこーおれはーあいな、おー
 おい箱おおお、お、根ーれ、れいれーれ、れ
 ーまーおまーおほーおいぬ。やーあれーハあ、ーち
 い、こいー思い、はあーは、れ、れ、あんせ。
 ーれ、馬あ、でれーれーれーれーれ、おこーお、お、越す
 にやーれこりやな。ーこーお、こすーう、う、にー
 い、これーれーれーれーれーれーれ、お、こすう
 ーうにーい、れーれーれーれーれーれ、こ、れーれ、やー

ペン毛筆両用紙

タカラ帳 十三号

あれ越さーあ、こ、こ、こ、れーれーれーれぬーう
 ーうはーあれあーんせ。ーれーおさーあ、大井いー
 川あ、あーわーあーあ、こ、まーお、お、ー、こ
 ーあ、あー、い、ーれ、こ、んな、い、れ、ん、ん
 あーれーれどーおんじよめーれどんじよー
 めどんじよめなーはあーい、こ、やーはあや
 丸こりやぬ。

釋十千

真掛塚

凡そ世中下高麗な物は宮女の杵に十二のきとさ

おいらん道中藝者に仕事師

向うに見るは霞か関よ

花は無けれと松田御門

向うに見るは聖堂の森よ

花は無けれと桜の馬場

えしに黒鐘車に乗せし

延子下引き出す御城取

ペン毛筆両用紙

黒骨ぼたんの扇をかざし

何處の祭のかへりやう

花は上野かもみじは染井

松は根岸の所儀の松

花に成なら山吹はよしやれ

花はよけれと實はならぬ

タカラ帳簿

十三号

暇

片お、んな。あらあ。片お え。お、
 お、い、ね。い、や、あ、れ、え、え、え、ご、く、ろ、お
 お、な、か、あ、ら、あ、も、お、た、の、え、い、ま、あ、
 あ、す、は、あ、り、お、あ、あ、は、あ、れ、わ、さ、ん
 の、お、片、お、じ、や、ま、お、い、さ、や、あ、え、
 え、え、え、え、え、え、え、え、え、え、
 、え、え、え、え、え、え、え、え、え、
 や、あ、あ、れ、ま、あ、あ、だ、あ、え、
 え、ま、お、お、お、い、ね。い、や、あ、れ、え、え

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

、え。向うに。見え、る、う、わ、か、す、
 む、い、が、あ、せ、え、き、い、ま、い、な、け、え
 れ、い、ち、ど、お、お、い、桜、田、御、お、も、え、
はあ、り、お、あ、あ、は、あ、れ、わ、さ、ん、の、お、片
 お、じ、や、ま、お、い、さ、や、あ、え、え、え、
 や、あ、あ、れ、せ、え、え、え、え、え、え、
 あ、ん、え。

拵十一号

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

酒田

酒田名る時涙で出たか

今は酒田の風といや

そろたそろたよ出羽様小性

秋の出穂よりなほ蒔た

此處は何處よと馬子衆に問へば

此處は信濃の仲仙道

出羽の羽黒に津里鐘掛し

ついでにはなせば千里びく

よい共きよいともきをまかせろやあれこれはいね。やあれさあ、かあ、、田あ、出ええ、るいう、う。とき、きさんさあのせなあ、あ、い、い、い。だあでええ、え、でえ、たあ、あ、あ、あ、い、まあ、あ、あ、あ、あ、あ、んえ、やあ、れ。さあ、かあ、あ、あ、たあ、のき、い、え、え、しんじを、かぜもい、あ、よき、い、あ、さあ、よいさんさのせえ、も、かせもい、あ、じあ、ねえ、片をりやあ、い、よ、き、のき、やれ、い、ま、あ、は、あ、

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

〇さあかあたあ、このき、き、んしんじを、か
 どもきい、あ、まき、い、さあ、あ、よいさんさの
 き、せえ、。

癸十一年

田歌

女せならせ我田とならせ君か田と

浅草の生茶屋の娘花か紅葉か花ならは

一 夜ほしや宿の土産に

いそがずばぬれざらましを旅人の

あどより晴る野路の村雨

牛路へ吹き行く風がどの云は

目に幾度も便りするもの

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

昔より歌讀む人は式部か小式部か

西行の坊様か小野の小町か

立田山紅葉を分けてある月は

錦にうつる鏡なりける

拾六が恋まじりかけ花さかせ

ちぎりに見れば我が妻となる

拾七が紅か羽つけた夢を見た

目さめて見れば元のしらば

拾七が殿子に送る其此の文はうす墨なれど

甲は恋路よ

繪師

咲た梅になせ駒つなばい

駒が勇めば花が散る

波の小橋はめぶさかくらか

諸国大名のをりのばい

波の川瀬のめの水車

誰を待つやら来る来ると

河原なでしこ野に咲く野菊

そこでその根が引にくい

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

今度来るならもて来つたもれ

伊豆の御山のなぎの葉子を

したい山崎おやめの里は

油しめ木の音がする

せたの唐檜唐金ぎ星

水に影さすせごの城

ペン毛筆両用紙

今度御座らば持つ来たもれ

伊豆の御山のなごの葉を

一度二度云うてはよしな

猿の木盛りや落ちやしまし

タカラ帳簿 十三号

日光

御世は目もたの若松様よ

枝も栄えり葉も繁る

峯の小松にしな鶴掛

谷の流で亀遊ぶ

朝の野に糸つ若采をつめば

露で小づまが皆ぬれる

小づまぬれても心はぬれぬ

事と定ぬれや皆ぬれる

松 坂

兄 松坂越えし明星の

茶屋腰掛ながむれば

兄 立下ば芍薬居直れば弟月霞下見えれば
みればたしかに明星

さても優しきお姿よ

弟 女ゆむ姿は百合の花

さても見事な牡丹花

兄 夜の梅をば見し良れ

主ある人の八重さくら

ペン毛筆両用紙

弟 片氷にひきかいたり杵は

さびしき事の山崎

兄 万津る浪と小吹き

身のなき事と思へども

弟 せめし筆書きつばた

まだ芍薬のねはきれぬ

兄 ^{不花蔵} 心のみに思ふ蓮の花

まだ芍薬のねはきれぬ

弟 心のみに思ふ御佛の

前心供へし蓮の花

タカラ帳簿 十三号

清念寺

打イヤ打イヤ 備後の妻

明日は船の帆を上げる

船は出て行く帆を上げて走る

宿の娘が掛り来りまねく

此處は何處かと馬子衆に問へば

此處は信濃の仲仙道

此處は何處かと船頭衆に問へば

こゝは壑島の植の浦

ペン毛筆用紙

今度御座らばおとす来りたまはれ

伊豆の御山のなぎの葉を

郡吉野の山路にかけし花笠を

我が子に着せて 郡吉野の花

七つ子が八つ子に送る玉づさを

いたへ書きし文の上書

我が国さ下見せたい物は昔谷風今達り猿狩

ゆかしなつかし豊城のこのふ地にはいそや松嶋はさ

我が国さ下見せたいものは秋は鳴く鹿山はとぎす

清き流氷のきぬたの音と他にはいそやたこの月と

タカラ帳簿 十三号

ばあえ、こう、へまお、お、いえう
 ずりやえうえうね。えんやあ、こあ
 おのおえ、さまあ、まあ、お、いな。やれう、
 う、い、え、こ、や、あ、こ、お、いう、ずりや
 う、う、う、ね。え、えん、お、お、の、え、お、も
 お、え、お、お、いな。やあ、れ、明、月、う、い、わ
 ぁ、お、お、い、船、明、え、え、の、お、ほ、お
 げえ、こ、る、う、え、こ、し、ま、ん、が、あ、え、ず、お、
 り、や、あ、ず、お、こ、い、ら、あ、こ、あ、こ、で、え、し

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

ん、しい、め、え、ち、お、こ、ま、あ、が、あ、せ、え、い、え、
 へ、え、こ、う、け、え、ち、お、お、こ、や、あ、れ、ほ、お
 え、に、い、こ、お、こ、ま、こ、お、と、お、に、い、い、え、え
 え、ず、れ、も、お、ず、お、こ、し、や、あ、ま、お、え、
 え、え、え、い、え、こ、え、え、う、え、い、や、こ、お、の、お
 お、え、い、い、ま、や、あ、あ、れ、お、お、い、な、あ、や、あ、れ
 明、月、う、い、わ、お、い、船、え、の、帆、お、帆、に、帆、お、
 な、あ、や、あ、れ、と、あ、え、こ、し、ま、ん、が、あ、い、え、こ、ず、あ、
 り、や、あ、お、あ、ず、ろ、く、た、に、え、こ、う、さ、ん、ず、ち、た、あ
 ぁ、ま、お、え、こ、え、ず、お、れ、え、い、わ、あ、つ、と、お

筆字音上る

ペン毛筆両用紙

タカラ帳簿 十三号

もなかりけえるう。なあ、かあ、このあ、
つう、なあ、いえ、はあ、え。

棒十七平

九分十三五

タカラ和式帳簿製造種目

| 品番号 | 帳簿名 | 綴枚数 | | | |
|-----|-------------|-----|------|------|------|
| 10号 | 三段 5行 | 50枚 | 100枚 | | |
| 11号 | 立 罫 5行 | 50枚 | 100枚 | | |
| 12号 | 立 罫 7行 | 50枚 | 100枚 | | |
| 13号 | 立 罫 10行 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | |
| 14号 | 三段 下替付 | | 100枚 | | |
| 15号 | 立 罫 12行 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | |
| 16号 | 二段 罫 | | 100枚 | | |
| 17号 | 三段 罫 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 18号 | 三段 替入 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 19号 | 四段 罫 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 20号 | 三段(特殊) 6行 | | 100枚 | | |
| 21号 | 三段(特殊) 11行 | | 100枚 | | |
| 22号 | 付込帳 | | 100枚 | 200枚 | |
| 23号 | 二段 用 | | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 24号 | 二段 月日 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 25号 | 二段 月日 替入 | | 100枚 | 200枚 | 300枚 |
| 26号 | 三段 8行 | | 100枚 | | |
| 27号 | 二段 月日 8行 | | 100枚 | | |
| 28号 | 当座帳 | | 100枚 | | |
| 29号 | 金銭出納帳 | 50枚 | 100枚 | 200枚 | |
| 30号 | 売上帳 | | 100枚 | | |
| 31号 | 仕入帳 | | 100枚 | | |
| 32号 | 出納帳 | | 100枚 | | |
| 33号 | 二段 月日 16行 | | 100枚 | 200枚 | |
| 35号 | 判取帳 | | 100枚 | 200枚 | |
| 36号 | 出勤簿 | 50枚 | 100枚 | | |
| 33号 | 月掛帳 | 50枚 | 100枚 | | |
| 40号 | 宿帳(みの判) | | 100枚 | 200枚 | |
| | 枕帳(金銭及荷物判取) | | 1丈 | 7丈 | |
| | 大福帳 | | 3丈 | 10丈 | |
| | 大和手帳 | | 1丈 | 3丈 | |
| | 買物台帳 | | 100枚 | 200枚 | |
| | 流買物台帳 | | 100枚 | | |
| | 古物台帳(洋式) | 50枚 | | | |
| | 判取帳(クロス罫) | 50枚 | 100枚 | 200枚 | |
| | 玉帳 | 50枚 | 100枚 | | |

◎別註帳簿御好みに応じ調整致します。

◎次回お買求めの際は品番号及何枚綴と御下命下さい。

◎帳簿は営業上大切な宝ですから特に製本に留意して居ります

小田原木遣

保存会

櫻井賀之所有

小田原市幸二

桜井

明治四二年（一九〇九年）一月一三日（横浜貿易新報）

「一昨日の消防出初式」

「▽御用邸前の壯観△

▽勇ましき□□□し△

新年式事の一に数へられし小田原町の消防出初式は一昨十一日小田原町御用邸前堀端に於て挙行せられぬ式場の中央には高サ百三十尺の丸太棒を立て竿頭には経一尺程もある張子の達摩をば吹筒の水力に依りて上下なし得る様の装置となし郡役所前より裁判所前小学校前等に至る堀端一体の路傍には各方面消防組の部署を定めたる立札を建てあり本部の位置は女子裁縫学校前其他右には新聞記者、各町村長其他来賓席を設けたり」

明治四三年（一九一〇年）一月一三日（横浜貿易新報）

「小田原 消防出初式」

「小田原町全町の消防出初式は十一日午前九時より御用邸前広場にて挙行し、先づ本県警務課長代理岸本保安課長の点検あり夫より梯子乗りありて次に例の注水試験の達磨落しあり終りを告げしは午後一時半頃なりしが小田原署にては所長初め署員総出にて指揮し郡役所よりは郡長其他町役場よりは今井町長宮田助役等立会せしが常日生憎雨天にて雪さへ交り寒気烈しかりしにも拘はらず一同何れも奮勵し好成績なりしが見物人も雨天を厭はず詰掛け殆んど立錐の地も無き盛況なりき」

大正六年（一九一七年）一月七日（横浜貿易新報）

「恒例の出初式」

「▲勤労者を表彰す

小田原町消防組二十六分隊は毎年一月十一日小田原町御用邸前に於て出初式

を挙行し終つて郡役所に於て執行官よりの□□いるが例にて本年は小田原消防組に片浦、早川、大窪、寺町、□□、山王、酒匂、□□、□□□□村の諸うっぽうくみと連合の下に同日午前くじより御用邸前に於て執行し梯子乗り及び放水試験等を行ひて下郡役所に於て各組小頭、組頭列席の上勤労者の表彰式を□ぐる□なり」

大正七年（一九一八年）一月二日（横浜貿易新報）

「御用邸前の壯観」

「◇小田原連合出初式

小田原町御用邸前の御濠端に於て行はる恒例の消防出初式は寒晴れの昨十一日午前九時より挙行された参加消防組は小田原町内の廿一組に寺町、井細田、多古、荻窪、山王、一色、酒匂、小八幡、板橋、風祭、水の尾、早川、石橋、米神、根府川等の

▲管内三十六組にて村落の舞台は未明より小田原町を指して詰めかけ幸町一丁目を埋めた。斯くて八時半□□た寒天に鳴り響く喇叭の音を合図に小田原消防旗を先頭に谷田組頭引率の下に歩調を揃へて箱根口を迂回し式場なる御用邸に入り込み定めめの席に着くと切目正しい、▲一斉に放水して各威力を示したが飛沫は□と降り旭光に映じて御用邸の松の□を五彩に染め壯観を□む斯くして式を終り各組の小頭以上は郡役所に集合□□の廿年余り勤労消防夫百二十名に対し石黒所長より表彰状を授与し訓示及び列席者の祝辞あり□に全く出初式を了した」

大正九年（一九二〇年）一月七日（横浜貿易新報）

「小田原町の鳶職組合紛憂」

「組合員が芸妓(げいしや)の箱持したとて 小田原町内の鳶職組合員中には毎年出入の芸妓屋に雇はれ三ヶ日間箱丁の代りを為し芸妓の供を為す者あるより他の組合員は鳶職組合の面目を損傷くるものと為し一昨年未猛烈なる反対を為し為に昨春は全部芸妓屋の出入りを断りたるが年頭芸妓の出入は収入頗る多く一日七八円より十円に当るを以て前年反対せし七八名が本年は箱持を成し芸妓の供を成したるより全組合員は頗る憤慨し除名処分を成さんと目下寄りく協議中なれば来るべき新年総会には非常なる紛憂を想起すべき形成なりと云う」

昭和五年(一九三〇年)一月五日(横浜貿易新報)

「小田原出初め」

「小田原町大窪早川連合消防出初は十一日小田原御濠端で行はれる」

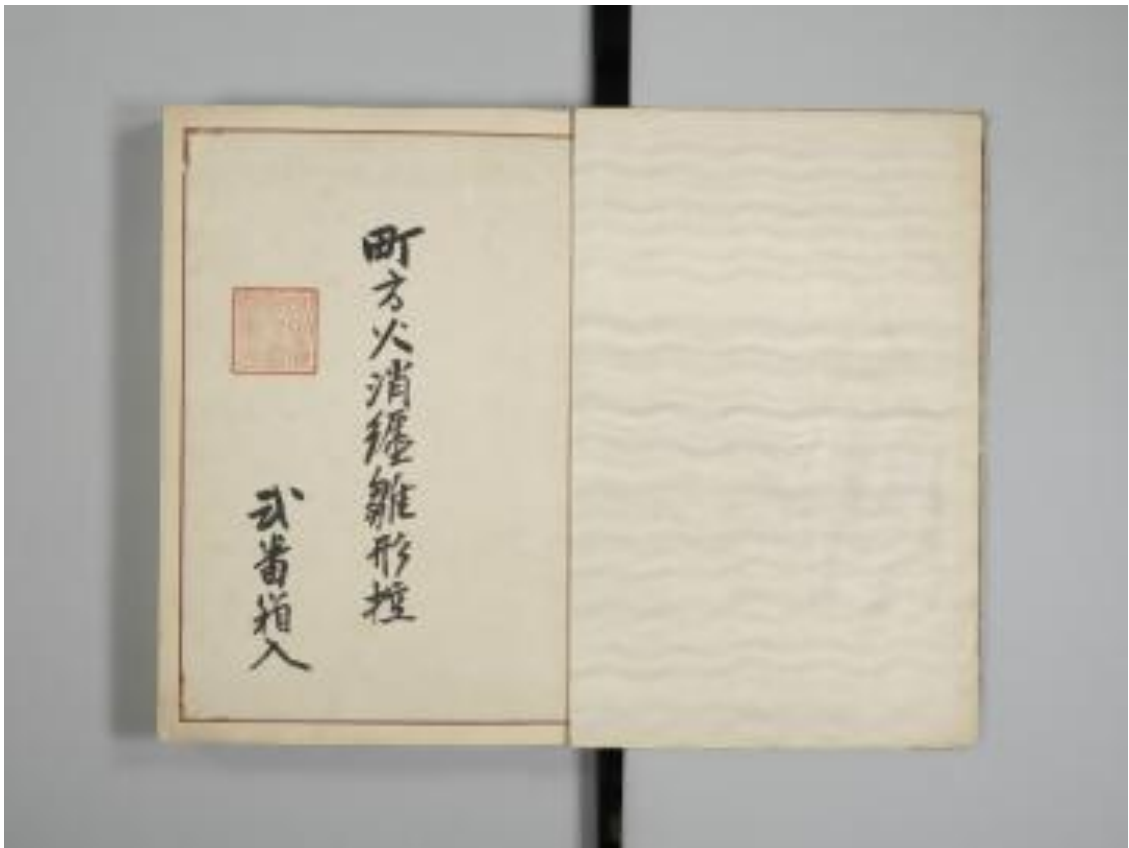
昭和一二年(一九三七年)一月一二日(横浜貿易新報)

「合併消防出初式」

「小田原町並に早川大窪両村合併消防出初め式は例年十一日挙行されたが本年は大日本消防協会松井博士の講演関係から十六日に延期されたので十一日鳶職一二番組の梯子乗りだけ行った」



9-4 旧小田原藩町方火消纏雛形（小田原市立図書館所蔵、おだわらデジタルミュージアムより転載）

































- 小田原市鳶職組合組合長 金子正房（昭和三三年生）
小田原市鳶職組合副組合長 大木孝一（昭和三四年生）
小田原市鳶職組合副組合長 湯川吉寛（昭和四三年生）

参考文献

- 小川建設「梯子乗り」(<https://ogawakensetu.tobitiro.jp/hasigo.html>) 二〇二四年五月一〇日閲覧)
小田原市立図書館編 一九七五年『小田原市立図書館郷土資料集成1 明治
小田原町誌 上』小田原市立図書館
小田原市立図書館編 一九七五年『小田原市立図書館郷土資料集成2 明治
小田原町誌 中』小田原市立図書館
小田原市立図書館編 一九七八年『小田原市立図書館郷土資料集成3 明治
小田原町誌 下』小田原市立図書館
小田原市企画調整部文化室編 一九八九年『小田原地方新聞記事目録』小田原
市文化室
小田原市編 一九九〇年『小田原市史 史料編近世Ⅲ藩領2』No.一〇八、小田
原市
小田原市 一九五一年「消防始式」『小田原市報』第一〇号、小田原市役所
小田原市 一九六五年「お城まつり」『広報小田原』第一八二号、小田原市役
所
仙台市教育委員会 二〇一七年『仙台市文化財調査報告書第432集 仙台消防
階子乗り民俗文化財調査報告書』仙台市教育委員会
高橋元治 二〇一三年「鳶三代、高橋組」『小田原史談』第二三五号、小田原
史談会
東京の消防百年記念行事推進委員会編 一九八〇年『東京の消防百年の歩み』
東京消防庁

戸澤利雄監修、創立一一〇周年記念誌実行委員会編 一九七五年『小田原鳶職
組合 創立一一〇周年記念誌』小田原鳶職組合

西山松之助編 一九七八年『江戸町人の研究』第五巻、吉川弘文館

松原神社明神會 二〇一五年『松原神社 明神會 二〇周年記念誌』協和印刷

山本純美 一九九三年『江戸の火事と火消』河出書房新社

横浜貿易新報社 一九一〇年「小田原 消防出初式」『横浜貿易新報』一月一
三日、横浜貿易新報社

横浜貿易新報社

横浜貿易新報社 一九一七年「恒例の出初式」『横浜貿易新報』一月七日、横
浜貿易新報社

横浜貿易新報社

横浜貿易新報社 一九二〇年「合併消防出初式」『横浜貿易新報』一月二日、横
浜貿易新報社

横浜貿易新報社

横浜貿易新報社 一九三七年「小田原町の鳶職組合紛擾」『横浜貿易新報』一
月二日、横浜貿易新報社

ピッチがほとんど下がっておらず、音楽的に高い技術を持っていたことがうかがえる。現在は①と比較すると細かい装飾が簡略化されているものの、基本的な曲の形を伝承しており、また木遣いを歌いながら棒を使って地付きのリズムを取るという伝統を保持しているといえる。

ただ、カワの歌唱中に徐々にピッチが下がってきってしまうのが残念である(歌い出しと比較し半音ほど下がっている)。①と③の音源ではピッチはほとんど下がっていないため、ピッチが下がっていくのは本来の歌い方ではないのではないかと考えられる。

注) 2024年10月27日戸塚区横浜市消防訓練センター(神奈川県横浜市戸塚区777)で開催された「第33回文化部研修大会」((一社)神奈川県鳶工業連合会)にて小田原市消防木遣の湯川吉寛(ゆかわよしひろ)氏に聞き取り

10-2 鳶職木遣採譜所見

寺田 真由美（京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員）

〔採譜音源〕

- ①「真鶴」（「CD 木遣り集」昭和 47 年 2 月制作）
小田原過去（昭和 47 年 2 月制作）
- ②「真鶴・手古」（文化部研修大会第 26 回小田原鳶職組合）
小田原現在（平成 26 年録音）
- ③「真鶴・手古」（文化部研修大会第 26 回川崎）
川崎現在
- ④「真鶴・手古」（令和 5 年小田原鳶職組合木遣唄練習）
小田原現在（令和 5 年録音）

【現状】

小田原古式消防に伝えられている木遣りは、「一声会」によって伝承されている。この「一声会」は大正 14 年（1925 年）に鳶職木遣の保存会として組織され、現在でも鳶職によって担われている。木遣は昭和の始めくらいに東京から来た桜井先生という木遣の先生（小田原市全域で教授）から教わったと伝えられている。

披露の主な機会は 1 月小田原市の出初式、5 月の「小田原北條五代祭り」、11 月「神奈川県鳶連文化部研修大会」と少なく、さらなる機会があればうれしいとのことである。

現在伝承されている曲は《真鶴》《手古》《石割》《珍重》《衛士》《松坂》《駅路》《黒鉄》《三河島》等 60 数曲あるが、実際歌唱機会のある曲は 10 曲ほどである。楽譜はなく口伝で伝承しているため習得が難しい。そのため鳶職以外からも木遣をやる人を募っているが、現状では応募者がいない。（注）

【木遣に対する所見】

《真鶴》《手古》は、ともに江戸系木遣では必ず歌われる曲である。両曲ともに「木遣師」（音頭）と「カワ」（一同）との掛合いになっている。小田原古式消防の「一声会」が伝える《手古》は、現在東京で「江戸木遣り」として保存会が伝承している同曲とは随所に違いがみられるものの、江戸系木遣りの影響を大きく受けているといえる。《真鶴》は「江戸木遣り」とほぼ同じである。

なお、③の川崎市の《真鶴》《手古》と、現在の②④とはほぼ同じとっていいくらい似通っている。伝承ルートは現在調査中である。

小田原古式消防木遣りの新旧の音源を比較すると、①の昭和 47 年の録音と現在とでは、特に《手古》の部分がいくつもの点で異なっている。採譜を見比べるとわかるように、①では音の装飾が多く、また掛合いも頻度が高く行われている。そしてアカペラの掛合いで 7 分近く歌っているにも関わらず、曲の最後まで

31

に イ イ イ こ れ は せ エ エ エ エ

This musical system contains six measures. The melody is written in the treble clef with a key signature of three sharps (F#, C#, G#). The accompaniment is in the bass clef. The lyrics are: に イ イ イ こ れ は せ エ エ エ エ.

37

え エい よオ を オ オ オ オ ほオ い

This musical system contains six measures. The melody is in the treble clef with a key signature of three sharps. The accompaniment is in the bass clef. The lyrics are: え エい よオ を オ オ オ オ ほオ い.

43

や ア ね

This musical system contains two measures. The melody is in the treble clef with a key signature of three sharps. The accompaniment is in the bass clef. The lyrics are: や ア ね.

小田原古式消防木遣 《真鶴》 《手古》

2023年練習動画(採譜：寺田真由美2024年7月)

♩ = 40-52

《真鶴》

木遣師

カワ

よ オ オ - を おん や りよ - え -

7

- エ よ オ - - - - を をオ

13 ♩ = 52 《手古》

よ おん やア あ - ら て エ こ - せ - エエ

19

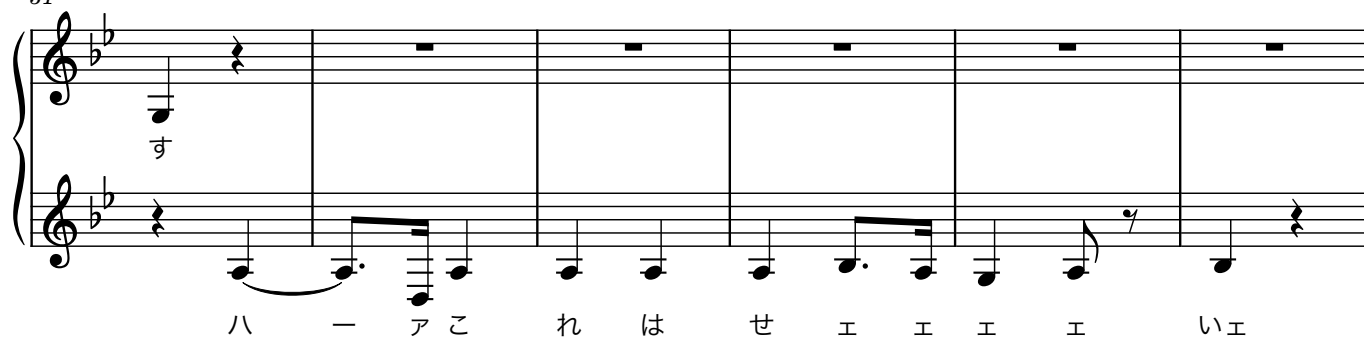
エ エ え え い よオ を オ オ オ

25

V

オ ほオ い や ア ね い ち ど オ オオ

31



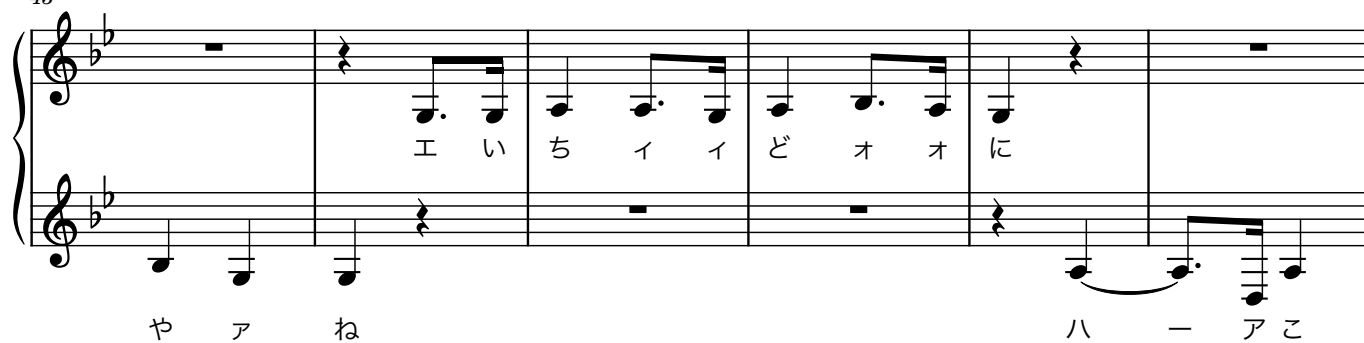
す
八 - ア こ れ は せ エ エ エ エ いエ

37



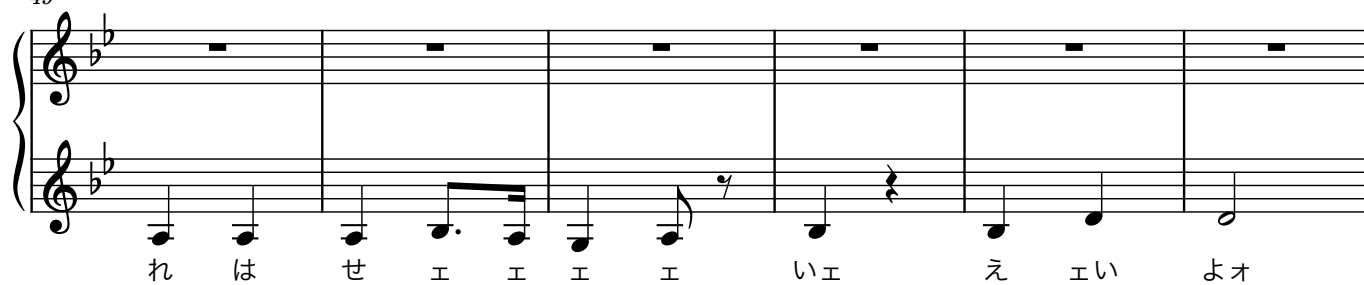
え エい よオ オ オ オ ほオ オ オ い

43



や ア ね
エ い ち イ イ ど オ オ に
八 - ア こ

49



れ は せ エ エ エ エ いエ え エい よオ

55



オ オ オ オ オ オ い や ア ね

川崎鳶職組合木遣 《真鶴》 《手古》

(採譜：寺田真由美2024年7月)

♩ = 45
《真鶴》

♩ = 50-57

よオ オー オ う やア れよオ

え

7

13 《手古》

よ オい やア ア アうれ て

エ こ オ せ エ エ

19

エ エ エ え エい よオ オ オ オ ほオ

25

エエ た の み イ ま ア ア

オ オ い や ア ね

31

ど オオ に イ イ イ
これ わ せ エ エ エ

37

え えエ い よオ を オ オ ほ オ オ

43

い や ア ね

小田原古式消防木遣 《真鶴》 《手古》

平成26年録音(採譜：寺田真由美2024年7月)

♩ = 64

《真鶴》

木遣師

カワ

よ オ を - オ う や りよ-

♩ = 69-71

え

7

- - - エ - よ オ オ -

13

《手古》

よオ オい やア ア ア うれエ て

- をオを エ こ オ

19

せ エ えい え えエ い よオ を オ

25

V

いち イ

オ オ オ ほオ い や ア ね

157

Musical notation for measures 157-162. The system consists of two staves. The upper staff (treble clef) contains six measures of whole rests. The lower staff (bass clef) contains six measures of music. The key signature has four flats (B-flat, E-flat, A-flat, D-flat). The notes in the lower staff are: G2 (half), F2 (half), E2 (half), D2 (half), C2 (half), and B1 (quarter), followed by a quarter rest.

163

Musical notation for measures 163-168. The system consists of two staves. The upper staff (treble clef) contains six measures of whole rests. The lower staff (bass clef) contains six measures of music. The key signature has four flats. The notes in the lower staff are: G2 (half), F2 (half), E2 (half), D2 (half), C2 (half), and B1 (quarter), followed by a quarter rest.

169

Musical notation for measures 169-174. The system consists of two staves. The upper staff (treble clef) contains three measures of whole rests. The lower staff (bass clef) contains three measures of music. The key signature has four flats. The notes in the lower staff are: G2 (half), F2 (half), E2 (half), D2 (half), C2 (half), and B1 (quarter), followed by a quarter rest.

37

え ー エ エ

オオ オオ エ ほ オオ オ オオオオ い イ や アア ね

*ここより音割れが
ひどく聞き取りが
部分的になるため
V 歌詞不記載

43

エ エ エ エ エ エ さら ー い ま ア ア やアア ア

49

55

61

67

小田原鳶職木遣 《真鶴》 《手古》

昭和47年録音CDより(採譜：寺田真由美2024年7月)

♩ = 50 《真鶴》

木遣師

カワ

よ オオオ オオオ んン ン やア りよー

え ー

7 《手古》

よ オいやア アア アア

ー エ エエエ やアー ー を オオオ オ

13

あ ら て

エ エエ こ オ せ ー エエ エ エ イえ

19

え い よオ オオ オオ オオオ ほ オオ オオ オオオオ い

25

や ー ア れ こ れ エ わ の オ オ

や アア ね こ

31

れ は せ ー エ エ エ イエ え い よオ

10 楽譜と採譜所見

- 10-1 楽譜（採譜：寺田 真由美 [京都芸術大学非常勤講師、相模女子大学非常勤講師、玉川大学非常勤講師、および横浜市無形民俗文化財保護団体育成検討会検討委員]）

[採譜音源]

- ① 「真鶴」（小田原鳶職組合、一聲会、小田原木遣保存会、木保睦会、CD「木遣り集」昭和47年2月制作）
- ② 「真鶴・手古」（小田原鳶職組合、文化部研修大会第26回、平成26年録音）
- ③ 「真鶴・手古」（川崎鳶職組合、文化部研修大会第26回、平成26年録音）
- ④ 「真鶴・手古」（小田原鳶職組合木遣唄練習、令和5年録音）

小田原古式消防調査報告書

発行年 令和7年3月

編集・発行 小田原市教育委員会

神奈川県小田原市荻窪 300 番地

小田原市文化財課

TEL 0465-33-1717